中日文對照

中國文藝叢書

送報伕

楊逵 作
胡風 譯

東華書局發行

中日文對照

中國文藝叢書 第六輯

送報伕

（新聞配達夫）

楊逵 作

胡風 譯

國家圖書館

002573100

由國家圖書館數位化、典藏

中國文藝叢書發刊序

光復以來，經有年半光景，本省同胞對國語學習的態度，是那麼認眞，其所獲得的成績，又是那麼豐富；而學習的群衆又是那麼廣泛。

我想，在全國普及國語運動上，本省同胞的收獲，的確可以炫耀，又可以自慰！

但是，一切的一切正由今日開始。因爲受了五十年的隔絕，今後要眞正理解祖國的文化，或者使我們學習得更爲正確，我們六百多萬同胞，不能不加緊努力學習。不但要眞確地理解認識祖國的文化，而且要哺育它，使它更爲高尚，更爲燦爛，使其眞正的精華宣揚全世界。

要達成這個目標，我敢大膽地說，過去本省所發刊的幾種書冊，多少尚有使人不能滿意的地方，這一次東華書局大有所感，決然計劃出版中國文藝叢書，精選國內名作家巨著，並爲適合臺灣今日的需要，加以日文全譯及詳細註解，況兼譯註者各得其人，可謂爲本省同胞及文藝愛好青年帶來一份豐美的精神糧食。此後繼續出版，對本省文化界之貢獻，我想一定大大可待。

我希望各位讀者就文學及語學兩方面，能够同時仔細用功，那麼雖是微小的冊子，不但有裨益於讀者諸君，卽是對整個國家文化的提高，亦大有所補。

蘇維熊

三六、一、十、於臺北

序

「新聞配達夫」は一九三二年に書き、賴和先生の手を通じて臺灣新民報に連載したが、後半は官憲に依り禁止された。一九三四年にまとめて東京の「文學評論」に載つたが、これも臺灣では禁止を喰つた。一九三六年胡風氏の譯が上海の「世界知識」に掲載され、續いて「世界弱小民族小說集」及び「朝鮮臺灣短篇集」等に收錄されたが、これらも臺灣に搬入することを禁止されて來た。

こんなわけで、この作品は、島內同胞の目にはあまり觸れてゐないと思ふ。ここに「光復」して讀者諸氏と會面することが出來たことは、作者の大きな喜びである。

テキストは黃得時氏の藏書を借り、賴女士等が抄寫して呉れた。誌して感謝の意を表したい。

一部削除の分は努めて書き込むことにしたが、譯文の方は手をつけないことにした。

一九四六・七・一　楊　逵

『呵！還可好了！……』

我想。我感到了像背着很重很重的東西，快要被壓扁了的時候，終於卸了下來似的那種輕快。

因爲，我來到東京以後，一混就快一個月了，在這將近一個月的中間，我每天由絕早到深夜，到東京市底一個一個職業介紹所去，還把市內和郊外劃成幾個區域，走遍各處找尋職業，但直到現在還沒有找到一個讓我作工的地方。而且，帶來的二十圓只剩有六圓二十錢了，留給帶着三個弟妹的母親的十圓，已經過了一個月，也是快要用完了的時候。

在這樣惴惴不安的時候，而且是從報紙上看到了全國失業者三百萬的消息而吃驚了時

『はつ、助かつた！……』

と私は思つた。私は重い〳〵荷物を擔はされて、もうべちやんこになりさうだと言ふ時に、重荷を下された時のやうな、スーとした晴々しさを感じたのである。

何故と言ふに、私は東京に來てから、かれこれ一箇月にならうとしてゐるのである。この約一箇月の間、私は毎日々々朝早くから晩遲く迄、東京市のあらゆる職業紹介所に立つたし、市內から郊外を幾つもの區劃に分けて、職を探して歩いたのに、今日に至つても未だ働かして呉れる所を見つけることが出來ないからである。おまけに、持金の二十圓はたつた六圓二十錢になつたし、三人の弟妹を抱へた母親に置いて來た十圓も、もう一箇月位經つたのだから切れさうな時である。

この心細い時に、更に新聞で、全國失業者三百萬と言ふ報道を見て驚いて居る時に、ひよつと××新聞舗のガラス戸に、新

聞配達夫募集のハリ紙を見たのだから、私は飛び立つ位に喜んだ。

『これで立志のいとぐちは見つかつたのだ』

と私が地獄から天國に昇つた程に嬉しがるのも驚くには當らないのである。私は胸を轟かせて××新聞舗の戸口に駈け寄り、その戸を開けて、

『今日は……』と叮嚀に頭を下げた。

午後の三時である。丁度夕刊が來たと見えて、部屋一杯に、皆は「ピューピューサツ」と忙しく新聞を疊んで居た。

頭を綺麗に分けて、半纏姿の中に、只一人、上等の洋服を着込んで椅子に腰掛けて、机に向つて居る主人らしい男が口から葉巻を手に移して、ぶつきら棒に、

候，偶然在××派報所底玻璃窓上看到「募集送報伕」的紙條子，我高興得差不多要跳起來了。

『這可找着了立志底機會了。』

我胸口突突地跳，跑到××派報所底門口，推開門，恭恭敬敬地打了個鞠躬。

『請問……』

是下午三點鐘，好像晚報剛剛到，滿房子裏都是「咻！咻！」的聲音，在忙亂地疊着報紙。

在短的勞動服中間，只有一個像是老板的男子，頭髮整齊地分開，穿着上等的西裝，坐在椅子上對着桌子。他把烟捲從嘴上拿到手裏，大模大樣地和墨一起吐出了一句：

『什麼事？……』

『呃……送報伕……』

我說着就指一指玻璃窓上的紙條子。

『你……想試一試麼？……』

老板底聲音是嚴厲的。我像要被壓住似地發不出聲來。

『是……是的。想請您收留我……』

『那麼……讀一讀這個規定，同意就馬上來。』

他指着貼在裏面壁上的用大紙寫的分條的規定。

第一條第二條第三條地讀下去的時候，我陡然瞠目地驚住了。

第三條寫着要保證金十圓，我再讀不下去

『何か？……』と煙と共に吐き出した。

『あの……新聞配達が……』

私は言ひかけてガラス戸のハリ紙を指さした。

『お前……やつて見たいと言のか？……』

主人の聲は嚴かだつた。私は押へつけられさうで聲が出なかつた。

『は……はい、働かして貰ひたいので』

『お前……この規定を讀み給へ。承知だつたら直ぐ來給へ』

と、彼は裏の壁に大きな紙に書いて張つてゐる個條書きの規定を指さした。

第一條、第二條、第三條と讀んで行く中に、私は、はつと驚きの目を見張つた。

第三條には、保證金拾圓を要すと書いてあるのである。私は

了，眼睛發暈……。

過了一會回轉頭來的老闆，看我到那種啞然的樣子問：

『怎樣？……同意麼？……』

『是……是的。同意是都同意。只是保證金還差四圓不够……』

聽了我底返辭，老闆從頭到脚地仔細地望了我一會。

『看到你這付樣子，覺得可憐，不好說不行。那麼，你得要比別人加倍地認眞做事！懂麼？』

『是！懂了！眞是感謝得很。』

我重新把頭低到他底脚尖那里，說了謝意。於是把另外鄭重地裝在襯衫口袋裏面，用

次ぎが讀めなくなつた。目暈がするのだ……。

暫くして振返つた主人は、私のボカンとしてゐるのを見て、

『どうだね？……承知か？……』と聞いた。

『は……はい。どれもこれも承知しましたが、四圓ばかり保證金が足らんので……』

私のこの返事を聞いて、主人は、暫く私の顏から身なりを見つめてゐたが、

『お前のこの身なりを見て居ると可哀さうになつてならぬから、不可んとも言へぬ。その代り、お前は、人より倍も眞面目に働かなくちやならぬぞ！いゝか？……』

『はい！承知しまして御座います。有難う御座います』

私はもう一度、彼の足先迄頭を下げてお禮を言つた。それから別にとつて置いて大事にシャツのポケットに入れて止め針で

別針別着的一張五圓票子和錢包裏面的一圓二十錢都拿出來，恭恭敬敬地送到老闆底面前，再說一遍：

『眞是感謝得很。』

老板隨便地把錢塞進抽屜裏面，說：

『進來等着。叫做田中的照應你，要好好地聽話！』

『是，是。』我低着頭坐下了。從心底裏歡喜着，一面想：

——不曉得叫做田中的是怎樣一個人？……要是那個穿學生裝的人才好呢！……

電燈開了，外面是漆黑的。

老板把抽屜都上好了鎖，走了。店子裏面止めて置いた五圓札一枚と懐中の一圓二十錢を出して恭々しく主人の前に捧げ、

『どうも有難う御座います』と更にもう一度繰返した。主人は金を無造作に抽出に入れると、

『上つて待ちなさい。お前は田中と言ふ人に世話して貰ふから、よく話を聞かなくちやいかぬぞ』

『はい』私は頭をペコ〳〵下げて、其處に腰掛けた。心の底から嬉しかつた。

——田中さんて人、どんな人だらうかしら？……あの溫さうな、學生服を着てた人だといゝがなあ……——と私は思つたりした。

電氣がついて外は眞暗になつてゐた。

主人は机の抽出にすつかり錠をかけて、さつきから出て行つ

空空洞洞的，一個人也沒有。似乎老闆另外有房子。

不久，穿勞動服的回來了一個，同來了兩個，暫時冷清清的房子裏面又騷擾起來了。我要找那個叫做田中的，馬上找住一個人打聽了。

『田中君！』那個男子並不回答我，却向着樓上替我喊了田中。

『什麼？……哪個喊？』

一面回答，從樓上衝下了一個男子，看來似乎不怎樣壞。也穿着學生裝。

『啊……是田中先生麼？……我是剛剛進店的，主人吩咐我要承您照應……拜託拜託』。

我恭敬鞠一個躬，衷心地說了我底來意，

て、店の中はがらんどうで、誰も居なかつた。主人の邸は別にあるらしかつた。

その中に半纏が一人歸つて來、二人歸つて來て、一時森とした家の中は騷々しくなつて來た。私は田中と言ふ人が氣になるので、早速或る一人をつかまへて聞いて見た。

『田中クーン』と、その男は私に答へる代りに、二階に向つて田中を呼んで呉れた。

『なんだ……誰が呼んで居るのだ？……』

と答へながら二階から飛び降りて來た男はと見ると、さう悪い男ではないやうだつた。矢張學生服を着てゐた。

『はあ……田中さんで御座いますか？……私は今度入りましたんですが、さつき主人の話では、あなたのお世話になれと言はれましたので……宜しく御願申します』

と私が叮嚀に頭を下げて。心からの御願を述べると、この

那男子臉紅了，轉向一邊，說：

『呵呵，彼此一樣』。

大概是沒有受過這樣恭敬的鞠躬，有點承不住罷。

『那麼……上樓去』。說着就登登地上去了。

我也跟着他上了樓。說是樓，但並不是普通的樓，站起來就要碰着屋頂。

到現在爲止，我住在本所底××木賃宿裏面。有一天晚上，什麼地方底大學生來參觀，穿過了我們住的地方，一面走過一面都說：

『好壞的地方！這樣窄的地方睡着這麼多的人！』

男、顏を紅らめて、そつぽ向いて、

『あゝさうか。お互さまだ』と言つた。

多分こんな叮嚀に頭を下げられたことがないので、持てあましてゐるのだらう。

『さあ……二階に上り給へ』と言つて、彼はトン〳〵梯子段を駈け上つた。

私も彼に續いて二階に上つた。二階と言つても普通の二階ではなくて、立つと屋根にぶつかる屋根裏だ。

私はこれ迄本所の××木賃宿に宿泊してゐた。或る晩何處かの大學生の見學だと言つて、我々の宿つてゐる所を見廻つたが、皆「ヒドイ！この狹い所にこんな多人數寢てゐる！」と言ひながら通つた。

所がこの××新聞舗の二階と來ては、それより十倍もヒドイ所だつた。

然而這個××派報所底樓上，比那還要壞十倍。

蓆子底面皮都脫光了只有草，要壓在草上面，而且是髒得漆黑的。

也有兩三個人擠在一推講着話，但大半都鑽在被頭裏面壓着了。看一看，是三個人蓋一床被。從那邊牆根起，一順地擠着。

我茫然地望着房子裏面的時候，忽然聽到了哭聲，吃驚了。

一看有一個十四五歲的少年男子在我背後的角落裏哭着，鳴鳴地響着鼻子。他旁邊的一個男子似乎在低聲地用什麼話安慰他，然而聽不見。我是剛剛來的，沒有管這樣的事的勇氣，但不安總是不安的。

疊の表はすつかりとれてしまつて、藁だ。藁の上にぢかに寢ることになつてゐる。しかも眞黑だ。

二三人づゝ一緒になつて喋つてゐる人も居るが、大半はもうフトンの中にもぐり込んでゐた。見ると三人で一枚の割でフトンを被て、向ふの壁から順にギツシリ詰められてゐた。

私が茫然と部屋の中を見廻してゐる時、一寸人の泣聲を聞いたので私はハツとした。

見ると一人の十四五位の男が、私の後の隅つこで「フン〳〵」鼻を鳴らしてゐるのである。彼の隣りの男が小さな聲で何とか言つて慰めてゐるやうだつたが聽えなかつた。私は始めて來たので、こんな事に迄出しやばる元氣はなかつたが、それでも不安だつた。

——我有了職業正在高興，那個少年爲什麼這時候在嗚嗚地哭呢？……

結果我自已確定了，那個少年是因爲年紀小，想家想得哭了的罷。這樣我自已就安了心了。

昏昏之間，八點鐘一敲，電鈴就『令！令！令！』地響了。我又吃了一驚。

『要睡了，喂。早上要早呢……兩點到三點之間報就到的，那時候大家都得起來……』

田中這樣告訴了我。

一看，先前從那邊牆根排起的人頭，一列一列地多了起來，房子已經擠得滿滿的，田中拿出了被頭，我和他還有一個叫做佐藤的男子一起睡了。擠得緊緊的，動都不能動。

——僕が職にありついて喜んでゐるのに、あの少年は一體何で今頃フン〳〵泣いて居るのだらう……——

で結局、私は、あの少年が泣くのは年の若いせいで、親でも戀しくなつたんだらうと一人で定めた。こうして自分を落ちつかせた。

こうしてボヤ〳〵してゐる中に八時が鳴ると「リン、リン、リン」と呼び鈴が鳴り響いた。私は又ハツとした。

『もう寢るんだ。君、朝は早いからな……二時から三時の間に新聞が來るので、その頃には皆起きるのだから……』

と、田中が教へて呉れた。

見ると、先つき向ふの壁際に列べられた人間の頭が、一列一列と殖えて、部屋はもう一杯である。田中がフトンを出したので、私は彼とそれからもう一人佐藤といふ男と一緒に寢た。ギツシリ詰つて身動きが出來ない。

和把瓷器裝在箱子裏面一樣，一點空隙也沒有。不，說是像沙丁魚罐頭還要恰當些。

在鄉間，我是在寬地方睡慣了的，鄉間底家雖然壞，但我底癖氣總是要掃得乾乾淨淨的。因爲我怕跳虱。

可是，這個派報所却是跳虱窠，從脚上，腰上，大腿上，壯子上，胸口上一齊攻擊來了，癢得忍耐不住。本所底木賃宿也同樣是跳虱窠，但那里不像這樣擠得緊緊的，我還能够常常起來捉一捉。

至於這個屋頂裏面，是這樣一動都不能動的沙丁魚罐頭，我除了咬緊牙根忍耐以外，沒有別的法子。

但一想到好容易才找到了職業，這一點點

陶器を箱に詰めた時のやうに、一分の隙もあつたものではない。否スシ詰と言ふ方がよつぽど正しい。

田舍では、廣い所に寢慣れた私だ。田舍の家は貧弱ではあつたが、私は何時も綺麗に掃除する癖があつた。ノミには私は閉口するからである。

所がこの新聞舖と來ては眞實のノミの巢で、脚から、腰から、股から、腹から、胸から一齊に攻擊して來るので痒くて我慢が出來ない。本所の本賃宿もノミの巢である點に於て變りはないが、それでもこんなギツシリ詰つた譯ではないので、私は時々起きてノミ退治をやることが出來た。

此の屋根裏と來ては、かくことも身動きも出來ないスシ詰だから、私は神經を殺して我慢するより外なかつた。

それでもやつと職にありついたのだと考へると、これ位……

……就滿不在乎了。

『比別人加倍地勞動，加倍地用功罷』，想着我就興奮起來了。因爲這興奮和跳虱底襲擊，九點敲了，十點敲了，都不能够睡着。

到再沒有什麼可想的時候，我就數人底腦袋，連我在內二十九個。第二天白天數一數看，這間房子一共鋪十二張蓆子。平均每張蓆子要睡兩個半人。

這樣混呀混的，小便漲起來了。碰巧我是夾在田中和佐藤之間睡着的，要起來實在難極了。想，大家都睡得爛熟的，不好掀起被頭把人家弄醒了。想輕輕地從頭那一面抽出來，但離開頭一寸遠的地方就排着對面那一排的頭。

なんでもなかつた。

『人の倍も働いて、人の倍の勉强をしよう』と私は考へて興奮した。この興奮とノミの襲擊で、私は九時が鳴つても十時が鳴つても、未だ寢つくことが出來なかつた。

私は考へることもなくなつたので、人の頭を勘定したりした。私も入れると二十九人である。翌日の晝數へた所では、この部屋は十二疊敷かれてあつた。疊一枚につき、約二人半の割合だ。

こうしてゐる中に、私は小便がしたくなつた。生憎、田中、と佐藤の間にはさまつて寢たので起きることに苦勞した。

何故なら、皆がぐつすり眠つてゐるのに、ブトンを動かして、目でも醒させるといかぬと思つたからだ。頭の方へスーと拔けようとすると、頭の上一寸ばかり離れて、向ふの列の頭が控へて居るのだ。

私は身體を斜にして、手をついて、注意深く（五分間もかゝつたであらう）身體を出さうとしたが、それでも佐藤君に一つぶつかつて、彼が寢返りを打つた。幸ひ目が醒めなくてよかつたが……

こうして起きたには起きたが、梯子段迄行くのが又一苦勞であつた。頭の方は一寸より離れて居ないから足場なんかありはしない。只、足は身體に比べて面積が小さいので、多少の隙はあつた。けれども足が皆フトンの中にあるのだから一體何處が足で、何處が隙だか一寸も見當がつかぬ。私は探り〳〵しては足場を見つけて、一歩踏み出すと言ふやうにして、やつと梯子段迄歩いたが、その間一人の足を踏みつけて吃驚して跳び上つた。

小便が濟んで歸つて來た時に、私は又大きな困難を經驗した。自分の寢床に辿りつく迄の困難は出る時と變りはなかつた

我斜起身子，用手撐住，很謹慎地（大概花了五分鐘罷）想把身子抽出來，但依然碰到了佐藤君一下，他翻了一個身，幸而沒有把他弄醒……

這樣地，起來算是起來了，但要走到樓梯口去又是一件苦事。頭那方面，頭與頭之間相積不過一寸，沒有插足的地方，脚比身體佔面積小，算是有一些空隙。可是，脚都在被頭裏面，哪是脚哪是空隙，却不容易弄清楚。我仔仔細細地找，找到可以插足的地方就走一步，好容易才這樣地走到了樓梯口。中間還踩着了一個人底脚，吃驚地跳了起來。

小便回來的時候，我又經驗了一個大的困難。要走到自己的鋪位，那困難和出來的時候

固然沒有兩樣，但走到自已底鋪位一看，被我剛才起來的時候碰了一下翻了一個身的佐藤君，把我底地方完全佔去了。

今天才碰在一起，不知道他底性子，不好叫醒他，只好暫時坐在那里，一點辦法也沒有。過一會在不弄醒他的程度之內我略略地推開他底身子，花了半點鐘好容易才擠開了一個可以放下腰的空處。我趕快在他們放頭的地方斜躺下來。把兩隻脚塞進被頭裏面，在冷的十二月的夜裏累出了汗才弄回了睡覺的地方。

敲十二點鐘的時候我還睜着眼睛睡不着。

被人狠狠地搖着肩頭，張開眼睛一看，房子裏面騷亂得好像戰場一樣。

昨晚八點鐘報告睡覺的電鈴又在喧鬧地響

が、寢床に辿りついて見ると、先つき私が起きる時に、一寸ぶつかつた爲めに寢返りを打つた佐藤君は私の分迄占領してしまつたのである。

未だ一緒になつたばかりで、彼の性質が知れないので、私は彼を起すことを躊躇し、暫く其處に坐つた儘でどうすることも出來なかつた。それから目を醒さない程度で、私は少しづゝ佐藤の身體を押しやり、半時間位もかゝつてやつと腰を入れるだけの隙を拔いたので、私は早速彼等の頭の所に腰を下して、兩足をフトンの中に突込み、寒い十二月の夜中に、汗迄かいてやつと自分の寢る所を取返すことが出來たのである。

十二時が鳴つた時も私は目がさめて未だ寢つかれなかつた。ひどく肩をゆすぶられて目を醒すと、部屋の中はまるで戰場のやうに騷々しかつた。

昨晚八時、就寢の知らせをやつた呼鈴が喧しく鳴り響いてゐ

着。響聲一止，下面的鐘就敲了兩下，我似乎沒有睡到兩個鐘頭。腦袋，昏昏的，沉重。

大家都收拾好被頭登登地跑下樓去了。擦着重的眼皮，我也跟着下去了。

樓下有的人已經在開始疊報紙，有的人用溼手巾擦着臉，有的人用手指洗牙齒。沒有洗臉盆，也沒有牙粉。不用說，不會有這樣文明的東西。我並且連手巾都沒有。我用水管子的冷水衝一衝臉，再用袖子擦乾了。接着急忙地跑到疊着報紙的田中君底旁邊，從他分得了一些報紙，開始學習怎樣疊了。起初的十份有些不順手，那以後就不比別人遲好多，能夠合着大家的調子疊了。

「咻！咻！咻！咻！」自己的心情也和着

た。それが止むと下の時計が二時を報じた。私は二時間も眠らなかつたやうだつた。頭はボーとして重かつた。

皆は、フトンを片付けると、トン〳〵階下に駈け下りて行つた。私も重いまぶたを擦り擦り後からついて下りた。

階下では新聞を疊み始めてゐる人もあり、濡れ手ぬぐひで、顏をこすつてゐる人もあり、指で齒を磨いてゐる人もある。洗面器も齒磨粉もなかつた。勿論こんな文化的なものは、私にも持合せはなかつた。その上、手ぬぐひ迄も私には持合せがなかつたので、私は冷い水道の水をざあーと顏にぶつかけて、袖で顏を擦つた。それから私は大急ぎで田中君が疊んでゐる傍に寄つて、彼から少し分けて貰つた新聞疊みの稽古を始めた。十部ばかりは少し不慣であつたが、それからは皆に大して遲れることなしに、皆と調子を合せて疊むことが出來た。

「ピューピューサツ！ピューサツ！」と自分の氣持迄が調子

這個調子，非常地明朗，睡眠不够的重的腦袋也輕快起來了。

早疊完了的人，一個走了，兩個走了出去分送去了，我和田中是第三。

外面，因爲兩三天以來積到齊膝蓋那麼深的雪還沒有完全消完，所以雖然是早上三點以前，但並不怎樣暗。

冷風颯颯地刺着臉。雖然穿了一件夾衣，三件單衣，一件衞生衣（這是我全部的衣服）出來，但我却冷得牙齒閣閣地作響。尤其苦的是，雪正在融化，雪面都是水水，因爲一個月以來不停地繼續走路，我底足袋底子差不多滿是窟窿，這比赤脚走在氷上還要苦。還沒有走幾步，我底脚就凍僵了。

早く終つた人から一人消え、二人消えして配達に出て行つた。私と田中は第三番目だつた。

外は二三日來降つた雪が膝位の所迄積つてゐて、未だ消えてはしまはないので、朝の三時前ではあるが、そんなに暗くはなかつた。

冷い風がピューピューと顏を刺した。あはせ一枚と單衣三枚にメリヤス一枚を重ねて（私の著物はこれで全部だつたのだ）出たのだが、私は寒さに齒をガタ〳〵震はした。殊に苦しかつたのは、雪が解けかゝつて、雪の下が氷水のたまりになつて居るのに、私の足袋はこの一と月來歩き續けたので、底は殆んど穴だらけになつて居た爲めに、跣で氷の上を歩いてゐる以上に苦しかつた。幾歩も行かない中に私の足は凍えてしまつて、堅

然而，想到一個月中間爲了找職業，走了多少寃枉路，想到帶着三個弟妹走途無路的母親，想到全國失業者有三百萬人……這就滿不在乎了。我自己鞭策自己，打起精神來走，脚特別用力地踏。

田中在我底前面，也特別用力地踏，用一種奇怪的走法走着。每次從雨板塞進報紙的時候，就告訴了我那家底名字。

這樣地，我們從這一條路轉到那一條路，穿過小路和横巷，把二百五十份左右的報紙完全分送完了的時候，天空已經明亮了。

我們急急地往回家的路上走。肚子空空地，覺得隱隱作痛。昨晚上，六圓二十錢完全被

くなつてしまつた。

それでも、一ケ月間職探しに無駄足を運んで來たこと、三人の弟妹を抱へて途方に暮れてゐるであらう母のこと、全國の失業者三百萬人のことを考へると……これ位何でもなかつた。私は自分を鞭打つて、元氣を出して歩いた。特に足に力を入れて踏み付けたりした。

田中は私の前から、これも特に足に力を入れて、滑稽な歩き方で、雨戸から新聞を入れる度毎に其處の名前を敎へてくれた。

こうして我々は路から路へ、小路や横町を拔けて、二百五十ばかりの新聞をすつかり配達してしまつた時には、空は已に明るくなつてゐた。

我々は大急ぎで歸途についた。腹は空つぽになつて居て、ピリツと痛みを覺えた。昨夜は六圓二十錢をすつかり主人に保證

老板拿去作了保證金，晚飯都沒有吃，昨天底早上，中午——不……這幾天以來，望着漸漸少下去的錢，覺得惴惴不安，終於沒有吃過一次飽肚子。

現在一回去都有香的豆汁湯和飯在等着，馬上可以吃一個飽——想着，就好像那已經擺在眼前一樣，不禁流起口涎來了。

『這次一定能够安心地吃個飽。』——這樣一想，脚下底冷，身上底顫抖，肚子底痛，似乎都忘起了一樣，爽快極了。

可是，田中並不把我帶回店子去，却走進稍稍前面一點的横巷子，站在那個角上的飯店前面。

昏昏地，我一切都莫明其妙了。我是自己金として取上げられて、終に飯を食ふことが出來なかつたし、昨日の朝、晝、否……この數日間は減つて行く金を見ると、心細くなつて、終、一度も滿腹に食つたことはなかつたのであつた。

私は、今歸つたら香しいミソ汁付の御飯が待つて居て、直ぐ腹一杯食へるのだと考へると、宛も、それが目の前に並べられてゐるやうに、唾を呑み込んだりした。

——今度こそ……安心して腹一杯食へるのだ——と考へると足の冷さも、身體の震へも、腹の痛みも、一時に忘れたやうに、からりとし爽てやかだつた。

所が田中は私を店の方へは連れて行かないで、少し手前の横町に入つて、その角にある飯屋の前に立つた。

私は夢心地で、何が何だかさつぱり分らなくなつてしまつ

確定了店子方面會供給飲食的。但現在田中君却把我帶到了飯店前面。而且，我一文都沒有；……

『田中君……』我喊住了正要拿手開門的田中君，說，『田中君……我沒有錢……昨天所有的六圓二十錢，都交給主人作保證金了……』

田中停住了手，呆呆地望了我一會兒，於是像下了決心一樣。

『那麼……進去罷。我墊給你……』拿手把門推開，催我進去。我底勇氣不曉得消失到什麼地方去了……。

好容易以爲能够安心地吃飽肚子，却又是這樣的結果，我悲哀了。

た。私は店の方で食はしてくれることに自分で定めてゐたのであつた。所が、今田中君は私を飯屋の前につれて來たのである。而も私は今無一文である……

『田中さん……』戸を開けようと手をかけた田中君を呼び止めて、『田中さん……私お金がないですが……昨日あつた六圓二十錢は、皆保證金として、主人に預けてしまつたので……』と言つた。

田中は戸に手を下して、暫くポカンと私を見て居たが、やがて思ひ切つたやうに、

『まあ……入らう。私が立替へてやるから』と又戸に手をかけて、ガラリと開けてから私を促がした。

私の元氣は一時に何處へやら……

やつと安心して腹一杯食へると思つて居たら、又こんな始末だ。私は悲しかつた。

『但是，這樣地勞動着，請他墊了一定能够還他的。』這樣一想才勉强打起了精神，吃了一個半飽。

『喂……够麼？……不要緊的，吃飽呵……』

田中是比我想像的還要溫和的懂事的男子，看見我這樣大的身體，還沒有吃他底一半多就放下了筷子，這樣地鼓勵我。

『但我覺得對不起他，再也吃不下去了。雖然肚子還是餓的。

『已經够了。謝謝你。』說着，我把眼睛望着旁邊。

因爲，望着他就覺得抱歉，害羞得很。

似乎同事們都到這里來吃飯。現在有幾個

——併し、こうして働いてゐるのだから、立替へて貰つた所が、返せぬことはない筈だ——と考へなほして、無理に元氣をつけたので、私はやつと半腹の飯をつめ込むことが出來た。

『君……それでいゝのかい？……大丈夫だから腹一杯食へよ……』

田中は考へた以上に優しい氣のきく男だつた。私がこんな大きな身體をしてゐるのに、彼の半分も食はないで箸を置いたのを見ると、こう言つて私を勵したのであつた。

けれども、私は田中君が氣の毒になつて、それ以上食ふ氣にはなれなかつた腹は未だ〳〵へつてゐるのだが、

『もう澤山です。有難う御座います』と言つて、彼から目をそらした。

彼の顏を見ると、氣の毒になつて、恥しいやうで堪らないからだ。

同僚達も、皆、此處で飯を食ふらしかつた。今數人來て食つ

人在吃，也有吃完了走出去的，也有接着進來的。——許多的面孔似乎見過。

田中君付了賬以後，我跟他走出來了。他吃了十二錢，我吃了八錢。

出來以後，我想再謝謝他，走近他底身邊，但看到他底那種態度（一點都不傲慢，但不喜歡被別人道謝，所以現得很不安）或就不作聲了。他也不作聲地走着。

回到店子裏走上樓一看，早的人已經回來了七八個。有的到學校去，有的在看書，有的在談話，還有兩三個人攤出被頭來鑽進去睡了。看到別人上學校去，我恨不得很快地也能够那樣。但一想到發工錢爲止的飯錢，我就悶氣起來了。不能總是請田中君代墊的。聽說田中君

て居るし、食つて出て行く人も居るし、又後から後からやつて來る顏を見ると、一度見たやうなのが多かつた。

田中君が勘定を拂つた後、私は彼に跟いて出た。彼は十二錢食べて、私は八錢食べた。

出てから、私は又お禮を言はうと思つて寄つて行つたが、彼のその態度（一寸も傲慢ではないが、お禮を言はれるのが嫌で、もぢ〳〵困惑する）を見ると私は默つてしまつた。彼も默々と歩いた。

店に歸つて、二階に上つて見ると、早い人は、已に七八人歸つて來てゐた。學校へ行く人もあり、本を讀んでゐる人もあつてお喋りをしてゐる人もあるが、二三人は再びフトンを出してその中に潜り込んでゐた。學校へ行く人を見ると、私も早く行き度い心で一杯だつた。併し給料を貰ふ迄の飯代を考へると、私は憂鬱だつた。何時迄田中君に立替へて貰ふことも出來ないだ

也在上學，一定沒有多餘的錢，能爲我墊出多少是疑問。

我這樣地煩悶地想着，靠在壁上坐着，從窓子望着大路，預備好了到學校去的田中君，把一隻五十錢的角子夾在兩個指頭中間、對我說：

『這借給你，拿着吃午飯罷。明後日再想法子。』

我不能推辭，但也沒有馬上拿出手來的勇氣。我凝視着那角子說：

『不……要緊？』

『不要緊。拿着罷。』

他把那銀角子擺在我膝頭上，登登地跑下樓去了。

らうからである。田中君も學校に出てゐるさうで、費用も相當かゝるのだから、どの位立替へて貰へるかは疑問である。

こうして私が考へ惱んで、壁にもたれて、窓から往來を見てゐると、學校へ行く用意を整へた田中君が、五十錢玉一つを二本の指ではさんで、

『君、これを貸してやるから、持つてて午飯でも喰へよ。その中に何とか心配しやうよ』と言つた。

私は辭はることも出來なかつたが、直ぐ手を出す勇氣もなかつた。私はぢつとそれを見つめて、

『大丈……夫？』と言かゝると、

『大丈夫だ。取つて置き給へ』

と彼はその銀貨を私の膝の上に落して、トントンと梯子段を飛び降りて行つた。

私は急いでそれを拾ひ上げると、しつかりと握りしめて、又目を外に向けた。

田中の思ひやりに私は感激してしまつて、涙が出さうだつたのである。

——生活がどうにかなつたら、少しお禮をせねばならぬ——

私はこんなことを考へたりした。と、私は又「フン〳〵」泣く聲を耳にしてハツト振り向いた。見ると昨夜泣いてゐた十四五歳位の少年である。

彼は名殘り惜しさうに包を片付けてゐたが、相變らず「フン〳〵」鼻をすゝり上げて、梯子段を下りて行つた。

——親でも戀しくなつて來たのだらう——と昨夜のやうに一人で定めて、その儘再び窓外に顏を向けた。暫くすると私は、彼が往來の向へ向へと、段々に小さくなつて、振り返り振り返りして歩いて行く姿を見た。

我趕快把牠拿起來，揑得緊緊地，又把眼睛朝向了窓外。

對於田中君的親切，我幾乎感激得流出淚來了。

「生活有了辦法，得好好地謝一謝他。」

我這樣地想了，忽然又聽到了『嗚！嗚！』的哭聲，吃驚地回過了頭來，還是昨晚上哭的那個十四五歲的少年。

他戀戀不捨似地打着包袱，依然『嗚，嗚！』地縮着鼻子，走下樓梯去了。

『大概是想家罷。』我和昨晚上一樣地這樣決定了，再把臉朝向了窓外。過不一會，我看見了向大路底那一頭走去，漸漸地小了，時時回轉頭來的他底後影。

不知怎地。我悲哀起來了。

那天送晚報的時候，我又跟着田中君走。

從第二天早上起，我抱着報紙分送，田中跟在我後面，錯了的時候就提醒我。

這一天非常冷，路上的水都凍了，滑得很，穿着沒有底的足袋的我，更加吃不消。手不能和昨天一樣總是放在懷裏面，凍僵了。從雨板送進報去都很困難。

雖然如此，我半點鐘都沒有遲地把報送完了。

『你底腦筋眞好！僅僅跟着走兩趟，二百五十個地方差不多沒有錯。』

在回家的路上，田中君這樣地誇奬了我，

私はなんだか悲しくなつてならなかつた。

こうして、この日の夕刊配達に私は又田中君について歩き、翌日の朝刊からは、私が新聞を抱へて配達して歩いた。田中は私の後に跟いて間違ふ度に注意してくれた。

この日は非常に寒かつた。路上の氷が凍つてしまつて刺々しかつたので底なしの足袋をはいた私には殊のほかこたへた。手は昨日のやうに何時も懷に入れて置くことが出來ないので、凍えて堅くなつてしまひ、雨戸の隙から新聞を差し込むことはなかなか難儀だつた。

それでも、私は半時間も遲れないで、新聞を配達してしまふことが出來た。

『君の頭はとつてもいゝな！たつた二度跟いて歩いただけで、二百五十の所を殆んど間違はなかつた……』

歸途、田中君はこう言つて私をほめたほど、自分でもうまく

行つたな…と考へる位だつた。注意されたのは二つか三つ廻る所の十字路で一寸迷つただけであつた。

この日は丁度日曜だつたので、田中の學校も休みだつた。朝飯が濟むと、新讀者勸誘に出るんだと言つて私を誘つたので、私も一諸に出た。我々二人はいゝ友達になつて、色んなことを喋りながら方々を歩き廻つた。私は田中君の如きいゝ友達が出來たことを喜んだ。

私が彼に學校のことを色々聞いた上、

『私も早く何處かの學校に行きたいと思ひますが……』と言つた時、彼は、

『さうか……それはいゝ！僕等二人で助け合つて一生懸命にやつて行かう』と言つた。

こうして毎日田中は自分の飯迄減らして、私に飯代を立替へてくれ、足袋代を貸してくれたりした。

我自己也覺得做的很得手，被提醒的只有兩三次在交叉路口上稍稍弄不清的時候。

那一天恰好是星期，田中沒有課。吃了早飯，他約我推銷定戶，我們一起出去了。我們兩個成了好朋友，一面走一面說着種種的事情。我高興得到了田中君這樣的朋友。

我向他打聽了種種學校底情形以後，說：

『我也想趕快進個什麼學校……。』他說：

『好的！我們兩個互相幫助，拼命地幹下去罷。』

這樣地，每天田中君甚至節省他底飯錢，借給我開飯賬，買足袋。

『送報的地方完全記好了麼?』

第三天的早報送來了的時候，老板這樣地問我。

『呃，完全記好了。』

這樣地回答的我，心裏非常爽快，起了一種似乎有點自傲的飄飄然的心情。

『那麼，從今天起，你去推銷定戶罷。報可以暫時由田中君送。但有什麼事故的時候，你還得去送的不要忘記了!』老板這樣地發了命令。不能和田中一起走，並不是不有些覺得寂寞，但曉得不會能够隨自己底意思，就用了什麼都幹的決心，爽爽快快地答應了「是!」田中君早上晚上還能够在一起的。就是送報罷，也不能够總是兩個人一起走，所以無論叫我

『お前配るところをすつかり覺えたかね?』

三日目の朝刊を配達して歸つて來ると、主人はこう言つて私に聞いた。

『はい!すつかり覺えました』

こう答へる私は、心から朗かになつて、何だか自慢したいやうな浮き〳〵した氣持になつてゐた。

『では、今日からお前は新讀者の勸誘に出給へ。配達は當分田中がやればいゝのだから。だが、何か事故のある場合にはお前が配達に行かなくちやならぬから、忘れてはいけないぞ』と、こう言ふ命令である。田中と一緒に歩けないことに、私は多少の淋しさを感じないでもなかつたが、そんなに自分の好都合ばかりがあり得る譯もない筈だから、私は何でもやる決心で、『はい!』ときつぱり答へた。田中君には、どうせ、朝晩、一緒になるんだから、又配達にしたところが、何時も二人で歩け

做什麼都好。有飯吃，能够多少寄一點錢給媽媽就行了。而且我想，推銷定戶，晚上是空的，並不是不能够上學。

於是從那一天起，我不去送報，專門出街去推銷定戶了。早上八點出門，中午在路上的飯店吃飯，晚上六點左右才回店，僅僅只推銷六份。

第二天八份，第三天十份，那以後總是十份到七份之間。

每次推銷回來的時候，老闆總是怒目地望着我，說成績壞。進店的第十天，他比往日更猛烈地對我說。

『成績總是壞！要推銷十五份，不能推銷

る譯もないから、私は何をやらされてもいゝのである。食ふことが出來て、多少でも親に送ることが出來ればいゝのだから。それに讀者勸誘にしたところが、夜は暇だから、學校に通ふことも出來ぬ筈はない——と私は考へた。

こうしてその日から私は配達に出ないで新讀者勸誘に廻つた。朝八時に出て、お午は途中の飯屋で食つて、夜の六時頃店に歸りついたのだが、勸誘した新讀者はやつと六人であつた。

その翌日は八人で、又次の日が十人、それからは十人と七人の間を繰り返した。

『お前は何時も成績が惡いぞ！十五人位勸誘し給へ。十五人出來なかつたら駄目だ！』

勸誘から歸つて來ると、何時も成績が惡いぞと言つてにらまれ

十五份不行的！』

十五份！想一想，比現在要多一倍。就是現在我是沒有休息地拚命地幹。到底從什麼地方能够多推銷一倍呢？

我着急起來了。

第二天，天還沒有亮，我就出了門，但推銷和送報不同，非會到人不可，起得這樣早却沒有用處。和强賣一樣地，到夜深爲止，順手推進一家一家的門，哀求，但依然沒有什麼好效果。而且，這樣冷的晚上，到九點左右，大概都把門上了閂，一點辦法都沒有。

這一天好容易推銷了十一份。離十五份還差四份。雖然想再多推銷一些，但無論如何做

るのだが、入つてから十日目に、彼はより猛烈に私にこう言つたのである。

十五人！考へて見ると今の二倍である。今だつて私は休みなしの一生懸命だ。何處から一體その二倍を勸誘することが出來やう？

私は心配になつてきた。

その翌日、私は夜の明けない中に出たが、勸誘は配達と違つて、人に會はなければならぬので、結局、こんなに早く出ても、役には立たなかつた。夜迄『今晚は……』と言つて、押賣り同樣に、手當り次第戸を開けては哀願したが、あんまりいゝ効果も見えなかつた。それに寒いこの頃の夜は、九時頃にもなると、大抵閉め切つてしまつて、どうすることも出來なかつた。

それでもこの日とつて來たのはやつと十一人である。十五人には未だ四人不足なのだ。だがこれ以上の努力は、やらうと思

つた處が、どうにもならないことである。

この日、私が疲れ切つて歸つて來ると、時計は已に十時十分前であつた。八時に寢る配達の同僚は、もう一寢入りした時だし、主人ももう寢てしまつてゐた。翌朝を待つて主人に報告すると、

『十一人？……未だ未だ……もつと〳〵努力せねばいかぬ。これぢや駄目だ！』との權幕だ。

事實、私は、今日こそほめられるだらうと期待してゐたのにこの權幕だから、すつかり怖けついてしまつた。それでも私には文句がなかつた。奴隷より一體何處がいゝと言ふのだらう!!

『はあ……はあ……』と私は引き下るより外なかつたのだ。勿論私は直ぐ又勸誘に出た。この日はとつても慘めであつた。私は泣きたい位に悲しかつた。私は同じく夜の十時頃になつて不到。

累得不堪地回到店子的時候十點只差十分了，八點鐘睡覺的同事們已經睡了一覺，老闆也睡了，第二天早上向老闆報告了以後，他兇兇地說：

『十一份？……不够不够……還要大大地努力。這不行！』

事實上，我以爲這一次一定會被誇獎的，然而却是這付兇兇的樣子，我膽怯起來了。雖然如此，我沒有說一個『不』字。到底有什麼地方比奴隸好些呢？

『是……是……』我除了屈服沒有別的法子。不用說，我又出去推銷去了。這一天慘得很。我傷心得要哭了。依然是晚上十點左右才

回來，但還僅只推鎖了六份，十一份部連說『不行不行』，六份怎樣報告呢？……（後來聽到講，在這種場合同事們常常揑造出烏有讀者來暫時渡過難關。可是，揑造的烏有讀者底報錢，非自己墊荷包不可。甚至有的人把收入底一半替這種烏有讀者付了報錢。當然，老板是沒有理由反對這種烏有讀者的。）

第二天，我惶惶恐恐地走到主人底前面，他一聽說六份就馬上臉色一變，勃然大怒了。臉漲得通紅，用右手拍着桌子。

『六份？……你到什麼地方玩了來的？不是連保證金都不够，很同情地把你收留下來的麼？忘起了那時候你答應比別人加倍地出力麼？走你底！這種東西是沒有用的！馬上滾出

歸つて來たのだが、それでやつと六人だつた。十一人でさへ「いかぬ」の連發だ。六人ではどうして報告することが出來やう？……（後で聞いた話だが、こんな場合、同僚はよく幽靈讀者を拵へて、一時を糊塗するさうだ。ところが拵へただけの幽靈讀者の新聞代は自腹を切らねばならぬので、稼ぎ高の半分を幽靈讀者にとられるのさへ居たさうである。勿論主人は幽靈讀者に反對する理由はなかつた）

翌日私は怖る〳〵主人の前に出たが、彼は、六人と聞いて顏色一變、偉い權幕だつた。顏を眞紅にして、右手で机を叩きながら、

『六人？……お前は一體何處でぶらついて來たんだい？保證金が足らぬにも拘らず、同情して入れたんぢやないか？その時、人の倍働くことを約束したのを忘れたのかい？やめろ！お前のやうな人間は役に立たぬ男だ！直ぐ出て行け！』と、保證

去！』他以保證金不足爲口實，咆哮起來了。

和從前一樣，想到帶着三個弟妹的母親，想到三百萬的失業者，想到走了一個月的寃枉路都有找到職業的情形，咬着牙根地忍住了。

『可是……從這條街穿到那條街，一家都沒有漏地問了五百家，不要的地方不要，定了的地方定了，在指定的區或內，差不多和捉虱一樣地找遍了……』。

我想這樣回答他，這樣回答也是當然的，但我却沒有這樣說的勇氣，而且，事實上這樣回答了就要馬上失業，所以我只好說：

『從明天起要更加出力，這次請愿諒……』

除了這樣哀求沒有別的法子。但是，老實說，這以上，我不曉得有應該怎樣出力。第二金の不足を楯に呶鳴られた。

私は何時ものやうに、弟妹三人を抱えた母、三百萬の失業者、一ケ月も無駄足を運んで職にありつけ得なかつたことを思ひ返して、ぢつと忍んだ。

『だつて……町から町へ、一軒も漏れなく勸誘して、一日五百戸もの家を訪ねたが、不要の所は不要だし、買つた所は已に買つてゐるので、自分に與へられた區域內では殆んどシラミつぶしに當つて見たんだから……』

と私は答へたかつたし、又こう答へるのが當然ではあるが、私はこれだけを言ふ元氣がなかつた。又事實、こう答へることは、失職を意味してゐた。そこで私は、

『明日からもつと精を出しますから、どうか御勸辨下さい…』

と哀願するより外なかつた。だが實の所、これ以上精の出し所を私は知らなかつた。これがその日の勸誘成績で眞ぐ裏書さ

天底成績馬上證明了。

那以後，每天推銷的數目是，三份或四份，頂多不能超過六份。這並不是我故意偷懶，實在是因爲，在指定的區域內，似乎可以定的都定了，每天找到的三四個人大抵是新搬來的。

『因爲同情你，把你底工錢算好了，馬上拿着到別的地方去罷。本店辦事嚴格，規定是，無論什麼時候，不到一個月的不給工錢。這是特別的，對無論什麼人不要講，拿去罷，到你高興的地方去。可憐固然可憐，但像你這樣沒有用的男子，沒有辦法！』

是第二十天。老板把我叫到他面前去，這樣教訓了以後就把下面算好了的賬和四圓二十

れた。

この日から以後、毎日勸誘した數といへば、三人四人、多くて六人を上ることがなかつた。これは決して私が意地で怠けたとか言ふやうな理由からではなく、指定された區域內では、買ひさうな人は皆んな讀者になつてゐたので、毎日拾つて來る三四人は大抵新移住者に限られてゐたからである。

『お前に同情して、お前の働いた分は勸定して置いたから、それを持つて直ぐ何處かへ行き給へ。當店は嚴格にやる主義で居るから、何時もは、月に滿たないものは、給與しない規定になつて居る。これは特別だから誰にも言はないで、とつて置いて何處へでも好きなところへ行け。可哀さうだが、お前のやうな役に立たぬ男は仕方がない！』

二十日目である。主人が私を前近く呼びつけて、こんな說諭をした上、左記の如き勸定書と共に四圓二十五錢を私の前に押

五錢推給我，馬上和忘記了我底存在一樣，對着桌子做起事來了。

我失神地看了一看，賬：

每推銷報紙一份	五錢
推銷報紙總數	八十五份
合計	四圓二十五錢

我吃驚了，現在被趕出去，怎麼辦，……尤其是，看到四圓二十五錢的時候，我暫時啞然地不能開口。接連二十天，從早上六點轉到晚上九點左右，僅僅只有四圓二十五錢！

『既是錢都拿出來了，無論怎樣說都是白費。沒法。但是，只有四圓二十五錢，錯了罷。』這樣想就問他：

『錢數沒有錯麼？……』

しやるなり、私の存在を忘れたかのやうに、机に向いてしまつた。

私はポカンとして讀んで見た。

讀者勸誘一人に付	五錢
勸誘人總計	八十五人
合計	金四圓貳拾五錢

私は今追つぽり出されたらどうしようか……と驚いた。殊に金四圓貳拾五錢也を見た時、私は啞然として、暫く口が開かなかつた。朝の六時頃から夜の九時頃迄歩き廻つて、それが二十日間も續いて、たつたの四圓貳拾五錢！

……こうして金を出された以上、何と言つても駄目だ。止むを得ない。併し只の四圓貳拾五錢は間違ひだらう——と私は考へたので、

『この金は間違ひではないでせうか？……』

老板突然現出兇猛的面孔，逼到我鼻子跟前：

『錯了？什麽地方錯了？』

『一連二十天……』

『二十天怎樣？一年，十年，都是一樣的！不勞動的東西，會從哪裏掉下錢來！』

『我沒有休息一下……。』

『什麽？沒有休息？反對罷？應該說沒有勞動！』

『……』我不曉得應該怎樣說了，灰了心想：加上保證金六圓二十錢，就有十圓四十五錢，把這二十天從田中君借的八圓還了以後，還有二圓四十五錢，哆也沒有用處。不要說什麽了，把保證金拿了走罷。

と聞いて見た。と主人は突然獰猛な顏を私に向けて、

『何が間違ひだ？へえ？何處が間違ひだ？…』とつめよつた。

『二十日間も……』

『二十日間がどうした！一年間でも十年間でも同じことだ！働かぬ奴に何處から金が降るものか！』

『私一寸も休みなしに……』

『何？休みなし？その反對だらう？働きなしと言へ！』

『……』私は言ふべき言葉を知らなかつた。私は諦めて、

——これでも保證金の六圓貳拾錢と合せたら十圓四十五錢になるから、この二十日間田中君から借りた八圓を返しても、後貳圓四拾五錢殘りがあるから、喧嘩してもしやうがない——と言ふ考へから——もうかれこれ言ふまい——保證金を返して貰

『沒有法子，請把保證金還給我。』我這樣一說，老板好像把我看成了一個大糊塗蛋，嘲笑地說：

『保證金？記不記得，你讀了規定以後，說一切都同意只是保證金不够？忘記了麼？還是把規定忘記了？如果忘記了，再把規定讀一遍看！』

我又吃驚了，：那時候只是耽心保證金不够，後面沒有讀下去，不曉得到底是怎樣寫的！……我胸口『東！東！』地跳着，讀起規定來。跳過前面三條，把第四條讀了：

那里明明白白地寫着：

第四條，只有繼續服務四個月以上者才交

つて出て行かうと思つて

『仕方がない！では保證金を返して下さい』と言ふと、彼は、如何にも私を馬鹿にしたやうにせゝらと嘲り笑つて、

『保證金だつて？お前規定を忘れたのか？忘れたのならもふ一度讀んで見い！』と言つた。

私は、もう一度驚かされた。當時は保證金の不足にばかり氣をとられて、終り迄讀まなかつたが、一體どんなものだらう……と私は胸を轟かせて、もう一度規定を讀んで見た。私は第三條迄を省いて直ぐ第四條を讀んだ。

其處には、明らかに、こう書いてあつた。

第四條、四ヶ月以上勤續者に限り保證金の還付をなす。」

還保證金。

我覺得心臟破裂了，血液和怒濤一樣地漲滿了全身。

睨視着我的老板底臉依然帶着滑稽的微笑。

『怎麼樣？還想交回保證金麼？乖乖地走！還在這里纏，一錢都不給！剛才看過了大概曉得，第七條還寫着服務未滿一月者不給工錢呢！』

我因爲被第四條嚇住了，沒有讀下去，轉臉一看，果然，和他所說的一樣，一字不錯寫在那里。

的確是特別的優待。

我眼裏含着淚，歪歪倒倒地離開了那里。

私は心臟が破裂して、血液が怒濤のやうに全身を荒れ狂つたやうな感じを覺えた。

私の睨みつけてゐる主人の顏は、相變らず皮肉の微笑を帶びて、

『どうだね？それでも未だ保證金を返せと言ふのか？さつさと出ろ！愚圖々々してゐたら一錢もやらぬぞ！今讀んだから分つたらうが、第七條勤續一ケ月未滿の者には給料の給與をなさずとあるのだぞ！』

私は第四條に氣をとられて、又も次を讀まなかつたが、顏を向けて見ると、確かに、一字も違はず彼の言ふ通りに書いてあつた。

確かにこれは特別の優待である！

私は目に淚を浮べて、あやしげな步調で其處を出た。ガラス

戸には憎らしい程鮮明に『配達人募集』の貼紙が私の心を促へて又貼つてあつた。

私は其處を出ると、直ぐ電車で、田中の出てゐる學校の前迄行つて、彼にこの經過を話し、

『借りた金は先づ三圓位お返して、殘額は次になんとかしてお返します。自分に一圓二十錢だけ當分の費用として持たして下さい……』

と賴んだところ、田中は僕から一錢も返して貰ふ考へのないことを言明した。

『君にまでこう出るとは思はなかつた。君が入つた當日、十四五の子供を見たか知らぬが、あれも君と同じ餌に釣られたものだよ。あれは讀者勸誘なんて全然駄目だつたんで、六日間で、保證金拾圓を捲きあげられて、一錢も貰はずに出たのだ。

玻璃窓上面，惹起我底痛恨的『募集送報伕』的紙條子，鮮明得可惡地又貼在那里。

我離開了那里就乘電車跑到田中底學校前面，把經過告訴他，要求他：

『借的錢先還你三元其餘的再想法子。請把這一圓二十五錢留給我做暫時的用費……。』

田中向我聲明，他連想我還他一錢的意思都沒有。

『沒有想到你都這樣地出去。你進庸的那一天不曉得看到一個十四五歲的小孩子沒有。也是和你一樣地上了鈎的。他推銷定戶完全失敗了，六天之間被騙去了十圓保證金，一錢也沒有得到走了的。』

眞是混蛋的東西。

『以後，我們非想些什麼對抗的法子不可！』他下了大決心似地說。

原來，我們餓苦了的失業者被那個比釣魚餌底牽引力還强的紙條子釣上了。

我對於田中底人格非常地感激和他分手了。而毫無遮蓋地看到了這兩個極端的人，現在更加吃驚了。

一面是田中，甚至節省自己底伙食，借給我付飯錢，買足袋，聽到我被趕出來了，連連說『不要緊！不要緊！』把要還給他的錢，推還給我，一面是人面獸心的派報所老板，從原來就因爲失業困苦得沒有辦法的我這里把錢搶

實にけしからぬ奴だ。

『我々はこれから何とか對抗する方法を講じなくちやならぬ！』と堅い決心を見せて言つた。

つまり、我々餓え切つた失業者は、あの鬼テグス以上の牽引力を持つた貼紙に依つて、うまうまと釣られて行つたのであつた。

私は田中の人格にひどく感激して、彼と別れた。そして、二人の極端なる人間を、まざまざと見せつけられて、今更ながら驚いた。

飯を減して迄、私に飯代、足袋代を立替へてくれ、私が追ひ出されたのだと聞くと、返さうと言ふ金を『いゝ！いゝ』とつき返す田中が居る反面には、只でさへ失業で困り切つて居る私達から、持金を奪つて拋り出す、自分の腹を肥す爲めには人を殺しても厭はん人面獸心の新聞舗主人が居る。

去了以後，就把我趕了出來，爲了肥他自己，把別人殺掉都可以。

我想到這個惡鬼一樣的派報所老板就膽怯了起來，甚至想逃回鄉間去。然而，要花三十五圓的輪船火車費，這一筆大款子就是把腦殼賣掉了也籌不出來的。我避開人多的大街走，當在上野公園底椅子上坐下的時候，暫時鬆軟了下來，心裏面是怎樣哭了的呀！

過了一會因爲想到了田中，才覺得精神硬朗了一些。想着就起了捨不得和他離開的心境。昏昏地這樣想來想去，終於想起了留在故鄉的，帶着三個弟妹的，大概已經正在被饑餓圍攻的母親，又感到了心臟和被絞一樣地難過。

同時，我好像第一次發見了故鄉也沒有什

私はこの鬼畜のやうな新聞舖主人を考へると、怖けついてじまつて、田舍に逃げ歸らうかとさへ考へた位であつた。併し、三十五圓もする汽車汽船賃は、首を賣つたところで、出來さうもない大金であつた。私は人通りを避けて歩いて上野公園のベンチに腰掛けた時、一時にがつかりしてしまつた。どんなに心の中で泣いたことか！

その中に私は田中を考へることに依つて、幾何かの心强さを覺えた。と、終には、別れ難い氣持にさへなつた。こうして、あれは、これはと考へに耽つてゐる中に、私は故鄉に殘して來た、三人の弟妹を抱へて、もう餓に攻められてゐるであらう母親を考へて、再び、心臟をエグられるやうな心細さを覺えた。

と同時に、私は、故鄉も大して變つては居ないことを、始め

麼不同，顫抖了。那同樣是和派報所老板似地逼到面前，吸我們底血，剛我們底肉，想擠乾我們底骨髓，把我們打進了這樣的地獄裏面。

否則，我現在不會在這里這樣狼狽不堪，應該是和母親弟妹一起在享受着平靜的農民生活。

到父親一代爲止的我們家裏，是自耕農，有兩甲的水田和五甲的園地。所以生活沒有感到過困難。

然而，數年前，我們村裏的××製糖公司說是要開辦農場，爲了收買土地大大地活動起來了。不用說，開始誰也不肯，因爲是看得和自己底性命一樣貴重的耕地。

て發見したかのやうに身顫ひした。それが、新聞舗主人のやうにぢり〳〵と迫つて來て、吾々の血を吸ひ、肉を搾り、骨迄しやぶらうとして、吾々をこのどん底にたゝきこんだことに變りはなかつた。

でなかつたら、私は、今頃、此處をこうしてウロツク必要もなく、今でも母や弟妹達と一緒に、靜かな百姓生活を樂しんでゐる筈である。

父の代迄の我が家には、二甲歩ばかりの田と五甲歩の畑を所有してゐた自作農であつた。從つて、生活に困るやうなことはなかつたのである。

ところが、數年前、私の村の××製糖會社が農場を開設すると言ふので、盛んに土地の買收をしようと活動した。勿論、始めの中は、誰も應じようとはしなかつた。自分の生命のやうに、大事にして來た耕地だからである。

併し、彼等が一旦やると定めたことだ。會社としてもウヤムヤに引込む筈はなかつた。其處で、二三日する中に、警察の方から、家長會議を開催する由の通達が、保甲を通じて村の各戸に漏れなく傳へられた。おまけに『印章を携帶せよ』と書き加へられてあつたのだ。

當時、私は十五歳で、公學校の五年生であり、今より五、六年ばかりも前の出來事ではあつたが、あまりに印象深かつたので、今でも、當時の樣子は明瞭に思ひ出すことが出來る。村は大恐怖に襲はれたのだ。

その時、父は保正をしてゐたが、管内の爺さん婆さんは、この通達以前からの緊張した空氣の中で、ビク〳〵して、泣き面をさげてはひつきりなしに、私の家にやつて來て、顫聲で、

『どうしませう？……』

但他們決定了要幹的事情，公司方面不會無結果地收場的。過了兩三天，警察方面發下了舉行家長會議的通知，由保甲經手，村子裏一家不漏地都送到了。後面還寫着『隨身携帶圖章。』

我那時候十五歲，是公立學校底五年生，雖然是五六年以前的事，但因爲印象太深了，當時的樣子還能够明瞭地記得。全村子捲入了大恐慌裏面。

那時候父親當着保正，保內的老頭子老婆子在這個通知發下來之前就緊張起來了的空氣裏面，戰戰兢兢地帶着哭臉接續不斷地跑到我家裏來，用了打顫的聲音問：

『怎麼辦？……』

「怎樣得了？……」

「什麼一回事？……」

同是這個時候，我有三次發現了父親躲着流淚。

在這樣的空氣裏面，會議在發下通知的第二天下午一點開了。會場是村子中央的媽祖廟。因爲有不到者從嚴處罰的預告，各家底家長都來了。有四五百人罷。相當大的廟擠得滿滿的。學校下午沒有課，我躲在角落裏看情形。因爲我幾次發見了父親底哭臉，甚爲耽心。

鈴一響。一個大肚子光頭殼的人站在桌子上面，裝腔做勢地這樣地說：

「爲了這個村子底利益，本公司現在決定

「どうなるでせうか？……」

「どんなことでせうか？……」

などと聞いたものだ。同じこの時に、私の父が隱れて泣いてゐたのを、三度も私が發見した位である。

こうした空氣の中に、會議は通達された日の翌日午後一時に開かれた。會場は村の中央にあつた媽祖廟である。集まらないものは嚴罰すると言ふ前フレがあつたので、各戸の家長が集つた。四五百人もあつたらう。可なりに廣い廟内は、ギツシリと詰められた。私は學校が午後から休みなので、隅の方に隱れて樣子を見た。何故なら、幾度も發見した父の泣き顏が氣にかゝつてならないからである。

鈴が鳴ると、太鼓腹のハゲ頭が机の上に立ち上つて、氣どつた態度で、こう話した。

「私の會社は、この村の爲めに、今度この村の北の方一帶に

了在這個村子北方一帶開設農場。說好了要收買你們底土地，前幾天連地圖都貼出來了，叫在那區域內有土地的人攜帶圖章到公司來會面，但直到現在，沒有一個人照辦。特別煩請原料委員一家一家地去訪問所有者，可是，好像都有陰謀一樣，沒有一個人肯答應。這個事實應該看作是共謀，但公司方面不願這樣解釋：所以今天把大家叫到這里來。回頭大人和村長先生要講話，使大家都能够了解，講過了以後請都在這紙上蓋一個印。公司預備出比普通更高的價錢……呃哼！』這一番話是由當時我們五年生底主任教員陳訓導翻譯的，他把『陰謀』『共謀』說得特別重，大家都吃了一驚，你望望我我望望你。

農場を開設することに決めた。そこで、お前達の土地を買ふ話しになつたのだが、先日にも地圖迄公示して、その區域內に土地を所有して居るものは、印章を持つて、會社に出頭せよと掲示したのに、今になつて、一人も出頭しない。わざ〳〵原料委員迄煩はして、所有者の家を一々廻つたにも拘らず、皆が陰謀して居る樣子に見受けられ、承諾すると言ふ人が一人もなかつた。この事實は、共謀と見なければならぬのだが、會社としては、さう言ふ意味に解釋し度くない。それで、只今、皆に集つて貰つたのだが、後から皆が了解出來るやうに大人にも、村長さんにもお話しをして貰ふことにしたから、話しが濟めば、皆、この紙に印章を押しなさい。會社としては普通よりいゝ値を出すつもりだ……エヘン』この雄辯は當時私達五年生の受持教師陳訓導が通譯したが、彼は『共謀』と『陰謀』の文句には、特に力を入れたので、村の衆は皆吃驚してしまつて、顏を見合せ

其次是警部補老爺，本村底警察分所主任，他一站到桌子上，就用了凜然的眼光望了一圈。於是大聲地吼：

『剛才山村先生也說過，公司這次的計劃，徹頭徹尾是爲了本村底利益。對於公司底計劃，我們要誠懇地感謝才是道理！想一想看！現在你們把土地賣給公司……而且賣得到高的價錢。於是公司在這村子裏建設模範的農場。這樣，村子就一天一天地發展下去。公司選了這個村子，我們應該當作光榮的事情：然而，聽說一部份人有『陰謀』對於這種『非國民』我是決不寬恕的……。』

他底翻譯是林巡査，和陳訓導一樣把『陰

た程だつた。

その次ぎに出たのが警部補大人で、當村の分室主任、机の上に立つや凄い目でギロリと皆を一つ見廻してから、

『今、山村さんも話されたやうに、會社の今度の計畫は徹頭徹尾、村の爲めに考へたことである。吾人はこの會社の計畫に有難く感謝するのが當然であるんである！考へて見い！今お前達が會社に土地を賣る……而も高い値で賣る、さうして會社がこの村に模範的な農場を建設する。さうすると、この村は段々に發展して行く。吾人は會社がこの村を選んだことを光榮とせねばならぬのである……然るに、一部には『陰謀』をして居る樣子があると聞く。そんな『非國民』には斷じて容シヤしない考へである……』

と呶鳴つた。彼の通譯は林巡査であつたが、陳訓導と同じく

謀』『非國民』『決不寛恕』說得特別重，大家又面面相覷了。

因爲，對於懷過陰謀的余清風，林少貓等的征伐，那血腥的情形還鮮明地留在大家底記憶裏面。

最後站起來的村長，用了老年底溫和，只是柔聲地說：

『總之，我以爲大家最好是依照大人底希望，高興地接受公司底好意。』說了他就喊大家底名字，都動搖起來了。

最初被喊的人們，以爲自己是被看作陰謀底首領，臉上現着狼狽的樣子，打着抖走向前去。當上面叫『你可以回去！』的時候，也還是呆着不動，等再吼一聲『走！』才醒了過來，『陰謀』と『非國民』と『容シヤしない』に力を入れたので、皆は又も顏を見合せた。

皆の記憶には、陰謀をした余清風、林少猫等に對する征伐の血醒い有樣が生々しく殘つてゐるからだ。

最後に立つた村長は、老年の溫和さで、猫撫聲を出して、『兎に角、大人方の希望に卽して、皆さんは會社の好意を喜んで受けたがいゝと思ひます』と言つたゞけで皆の名前を呼び出した。と皆は動搖した。

始めて呼ばれた人々は、自分を陰謀の首魁と見られたのではないかと言ふ狼狽が、ありありと顏に表はれぶる〳〵顫へながら出て行つたが『お前は歸つてもいゝ！』と言はれた時も、ポカンとしてゐて、もう一度『歸れ！』と呶鳴られて、始めて我

，逃到外面去！

在跑回家去的路上，還是不安地想：沒有聽錯麼？會不會再被喊回去？無頭無腦地着急。像王振玉，聽說走到家爲止，回頭看了一百五十次。

這樣地，有八十名左右被喊過名字，回家去了。

以後，輪到剩下的人要吃驚了。我底父親也是剩下的一個。因爲不安，人中間騰起了嗡嗡的聲音。伸着頸，側着耳朵，會再喊麼？會喊我底名字麼？……這樣地期待着，大多數的人都惴惴不安了。

這時候，村長說明了『請大家拿出圖章來，這次被喊的人，拿圖章來蓋了就可以回去』

に歸つて逃げ出すと言ふ始末！

走つて歸る途中も、聞き違ひぢやないか？又呼び戻らされはしないか？と言ふやうな不安で、氣が氣でないらしく、王振玉の如きは、家に着く迄に百五十回も振返つて見たと言ふ、ナンセンスもあつたとのことだ。

こうして八十人ばかり呼び出されて、歸された。

こうなると、今度は殘された者の驚く番となつた。私の父も殘された一人だつた。皆は、不安の爲めにどよめき立つた。首を伸ばして、耳をそば立てゝ、又呼びはしないか？自分の名前を呼びはしないか？……の期待で、大多數の者はそは〳〵してゐた。

この時『皆印章を出しなさい。今度名前を呼ばれた人はい印章を持つて來て押せば、歸つて宜しい』と村長が說明してから

以後，喊出來的名字是我底父親。

『楊明……』一聽到父親底名字，我就着急得不知所措，屏着氣息，不自覺地揑緊拳頭站了起來。——會發生什麼事呢？……

父親鎭靜地走上前去。一走到科長底面前就用了破鑼一樣的聲音，斬釘截鐵地說：

『我不願賣，所以沒有帶圖章來！』

『什麼？你不是保正麼！應該做大家底模範的保正，却成了陰謀底首領，這才怪！』

站在旁邊的警部補，咆哮地發怒了，逼住了父親。

父親默默地站着。

『拖去！這個支那猪！』

呼んだのが、私の父だつた。

『楊明……』と言ふ父の名前を聞いた時、——どうなるだらう？……——と私は氣が氣でなくなつて、カタヅを呑んで思はず拳を握つて立ち上つた。

父は落付いて出て行つた。村長の前に出ると破鐘を打つやうな聲で、

『私は賣ることが出來ませんから、印章を持つて來ません！』

とキツパリ言ひ切つた。

『何？お前は保正ぢやないか！皆の模範たるべき保正が陰謀の首魁となるなんて、けしからん！』

と威猛高になつて、傍に立つてゐた警部補がつめよつた。

父は默々として立つてゐた。

『引張つて行け！このシヤンコロ奴！』

警部補狼狽打了父親一掌，就這樣發了命令。不曉得是什麼時候來的，從後面跳出了五六個巡査，最先兩個把父親捉着拖走了以後，其餘的就依然躲到後面去了。

看着這的村民，更加膽怯起來，大多數是，照着村長底命令把圖章一蓋就都不向後面望望一地跑回去了。

後來聽到說，到大家走完爲止，用了和父親同樣的決心拒絕了的一共有五個，一個一個都和父親一樣被拖到警察分所去了。但我一看到父親被拖去了，就馬上跑回家去把情形告訴了母親。

母親聽了我底話，即刻急得人事不知了。幸而隔壁的叔父趕來幫忙，性命算是救住

警部補が手を出して、一つ擲りつけてからこう命ずると、何時の間に集つて來たのか、奥の方から巡査が五六人、パツと飛び出して來た。最初の二人が父を捕へて出てしまふと殘りのものは又奥の方に引込んだ。

これを見た村の衆は、愈々怖けついてしまつて、村長の命ずる儘に、印を押すと、後をも顧みないで歸つて行くのが多かつた。

皆が出てしまふ迄、父と同じ決心を持つて拒絶したのが皆で五人、そして何れも父と同じやうにこの村の警察分室に引張られて行つたと後で聞いたが、私は父がつれて行かれたのを見るや、一目散に、家に走つて歸り、母に右の樣子を知らせたのであつた。

母は私の話を聞いて卒倒してしまつた。

幸に、隣りの叔父さんが直ぐ駈けつけて、助けて呉れたから

了，但是，到父親回來爲止的六天中間，差不多沒有止過眼淚，昏倒了三次，瘦得連人都不認得了。

第六天父親回來了，他又是另一件情形，均衡整齊的父親底臉歪起來了，一邊臉頰腫得高高的，眼睛突了出來，額上滿是疱子。衣服弄得一團糟，換衣服的時候我看到父親底身體，大吃一驚，大聲地叫了出來：

『哦哦！爸爸身上和鹿一樣了！……』

事實是，父親底身上全是鹿一樣的斑點。那以後，父親完全變了，一句口都不開。從前吃三碗飯，現在却一碗都吃不下，倒床了以後的第五十天，終於永逝了。

命に別條はなかつたが、父が歸つて來る迄の六日間は、殆んど泣き通しで、三度も卒倒し、見違へるほどに瘦せてしまつた。

六日目に父は歸つて來たが、彼も又、非常な變り方で、均整のとれた父の顏は、ゆがんでしまつて、片方の頰はひどく腫れ上り、目はつき出てしまつて、額はコブだらけであつた。着物はボロ〳〵になつてしまつて、それを着換へる時私は父の身體を見て吃驚してしまつて、大きな聲でこう叫んだほどであつた。

『おゝ！父ちやんの身體は鹿のやうになつてゐる……』

事實、父の身體には鹿のやうなハン點が身體中に一杯出來てゐたのであつた。それからの父は、一變してしまつて、ムツツリと、何一つ口を聞かなくなつた。飯も三碗づゝ食つて居たのが、一碗も食べ切れないやうになつて、寢ついてから五十日目に、とう〳〵永眠してしまつた。

同時母親也病倒了，我帶着一個一歲一個三歲一個四歲的三個弟妹，是怎樣地窘迫呀！叔父叔母一有空就跑來照應，否則，恐怕我們一家都完全沒有了罷。

這樣地，父親從警察分所回來的時候被丟到桌子上的六百圓（據說時價是二千圓左右，但公司却說六百圓是高價錢），因爲父親底病母親底病以及父親底葬式等，差不多用光了，到母親稍稍好了的時候，就只好出賣耕牛和農具糊口。

我立志到東京來的時候，耕牛，農具，家裏的庭園都賣掉了，剩下的只有七十多圓。

同じ頃に母も寢ついてしまつたので、私は一つと三つと四つの三人の弟妹を抱へて、どんなに途方に暮れたことか！

叔父と叔母が、少しでも閑があると、やつて來ては世話して呉れたからよかつたものの、さうでなかつたら、恐らく我々の一家は全滅してしまつたであらうと思はれる。

こうして、父が警察分室から歸つて來ると、机の上に叩きつけた六百圓（話しに依ると、時價二千圓位だつたさうだが、會社は六百圓を以つていゝ値だとした）は、父の病氣、母の病氣それから、父の葬式等で、殆んど消えてしまつて、母の工合が少しよくなつた頃には、牛や農具を賣つて食はねばならなくなつてゐた。

私が志を立てゝ、東京に出て來る頃には、牛も、農具も、家の庭園も皆賣つてしまつて、その食ひ殘りが只の七拾圓であつた。

『しつかり勉强して……ね！』と母が涙聲で、戸口に立つて私を見送り、勵まして呉れた。その樣子が、目の前に見えるやうだ。

この慘狀は、私一家だけではなかつた。

父と一緒に警察分室に引張られた五人は、皆、同じこの運命に會つたし、默々と印章を押してやつた人達も、耕す田を失つて、月に三日乃至五日間位、製糖會社農場の苦力として、一日十二時間働いて、四十錢位にありつくのがせいぜいで、皆が皆土地を賣つた金で食つて行く外なく、その金が消える頃には、村の有力者達が言つた『村の發展』とは反對に、今頃では『村の離散』になつてしまつてゐるのであつた。

こんな思ひ出に耽つてゐる間に、何時の間にか、太陽が沒してしまつて、上野の森は暗闇に隱れ、山下では電氣が賑やかに輝き出した。私も寒さが身にしみて、居堪らなくなつて來た。

『好好地用功……』母親站在門口送我，哭聲地說了鼓勵的話。那情形好像就在眼前。

這慘狀不只是我一家。

和父親同樣地被拖到警察分所去了的五個人，都遇到了同樣的運命。就是不做聲地蓋了圖章的人們，失去了耕田，每月三五天到製糖公司農場去賣力，一天做十二個鐘頭，頂多不過得到四十錢，大家都非靠賣田的錢過活不可。錢完了的時候，和村子裏的當局者們所說的『村子底發展』相反，現在成了『村子底離散』了。

沉在這樣回憶裏的時候，不知不覺地太陽落山了，上野底森林隱到了黑闇裏，山下面電車燦爛地亮起來了，我身上感到了寒冷，忍耐

不住。我沒有吃午飯，覺得肚子空了。

我打了一個大的呵欠，伸一伸腰，就走下坡子，走進一個小巷子底小飯店，吃了飯。想在乏透了的身體裏面恢復一點元氣，就決心吃了一個飽，還喝了兩杯燒酒。

以後就走向到現在爲止常常住在那里的本所底××木賃宿。

我剛剛踏進一隻脚，老板卽刻看到了我，問：

『喂呀：不是臺灣先生麼！好久不見。這些時到哪里去了……。』

我不好說是做了送報夫，被騙去了保證金辛苦了一場以後被趕出來了。

私は晝飯を食はなかつたので、空腹を感じた。

私は大きなあくびと共に、身伸びをしてから、坂を下りて、とある裏通りの小さな飯屋に入つて飯を食つた。しほれかゝつてゐる身體に、幾分かでも元氣を呼び醒さうと思つて、思ひ切つて私は腹一杯に飯をつめ、その上、燒酒をコップ二杯ばかり飲んで見た。

それから、今迄よく世話になつて來た。本所の××木賃宿に足を向けた。

私が家の中に一歩踏み込むと、主人は直ちに私を見つけて、

『おや！……臺灣さんぢやないか！暫くだつたね。この間、何處へ行つて居たの……』と聞いた。

私は、新聞配達になつて、保證金を奪はれて、酷き使はれて今追出されたのだとは言へなかつたので、

『ち？……ちよつと友達のところへ……』と言ふと、『友達の……ふむ大分老けたね！』と不審がつて、

『在朋友那里過……過了些時……』

『朋友那……唔，老了一些呢！』他似乎不相信，接着笑了：

『莫非幹了無線電，討擾了上面一些時麼？……哈哈哈……』

『無線電？……無線電是什麼一回事？』我不懂，反問了。

『無線電不曉得麼？……到底是鄉下人，鈍感……』

雖然老頭子這樣地開着玩笑，但看見我似乎很難爲情，就改了口：

『請進罷。似乎疲乏得很，進來好好地休息休息。』

我一上去，老板說：

『ラヂオでもやつて、お上に厄介になつたで——ねえか？……ワツハハハ』と笑つた。

『ラヂオ？……ラヂオつてなんのことですか？』と私は理解出來ずに聞いたら。老爺は可笑がつて、

『ラヂオを知らぬのかい？……ワツハハハ……やつぱり田舍者はウトイな……』

と冗談に言ひながらも、大分氣の毒がつてゐる樣子が見え、

『さあ〳〵お上りなさい。何だか大變疲れてゐるやうぢやないか上つてゆつくりと休めよ』など言つて呉れた。

私が上ると、

『那麼，楊君，幹了這一手麼？』

說着做一個把手輕輕伸進懷去的樣子。很明顯地，似乎以爲我是到警察署底拘留所裏討擾了來的。當時不懂得無線電是什麼一回事，但看這次的手勢，明明白白地以爲我做了扒手。我沒有發怒的精神，但依然紅了臉，不應不尴地否認了：

『哪里話！哪個幹這種事！』老頭子似乎還不相信，疑疑惑惑地，但好像不願意勉强地打聽，馬上嘻嘻地轉成了笑臉。

事實上，看來我這付樣子恰像剛剛從警察署底猪籠裏跑出來的龍。

我脫下足袋，剛要上去。

『楊さん！ではこれでもやつたのかい？』

と言つて、彼は手をコツソリ懷中に入れる振りをして見せた。明らかに、私が警察の厄介になつて來たと思つてゐるらしい。當時、ラヂオのことを私は知らなかつたが、手眞似を見せられると、今度言つてゐるのがスリをやつたんぢやないかと聞いてゐるのがよく理解出來た。私は怒る元氣もなかつたが、それでも顏を紅らめて、狼狽氣味で、

『いゝや！そんな事やるもんか！』とキツパリ打消した。老爺は、それでも信ぜられないと言つた樣子で、氣の毒さうにしてゐたが、併し無理に聞かうともしないらしく、直ぐ笑顏になつてニコ〳〵笑つてゐた。

事實、私の樣子が警察の豚箱から出て來たばかりに見えたであらう。

私が足袋をとつて、上りかけると、

「哦，忘記了。你有一封掛號信！因爲弄不清你到哪里去了，收下放在這里……等一等……」說着就跑進裏間去了。

我覺得奇怪，什麼地方寄掛號信給我呢？過一會，老頭子拿着一封掛號信出來了。望到那我就吃了一驚。

母親寄來的！

「到底爲了什麼事寄掛號信來呢？」我覺得奇怪得很。

我手抖抖地開了封。什麼，裏面現出來的不是一百二十圓的滙票麼！我更加吃驚了。我疑心我底腦筋錯亂了。我胸口突突地跳，一個字一個字地讀着很難看清的母親底筆跡，我受

「やあ、忘れてゐたことがあつた。お前さんに書留が來てゐたぜ！お前さん何處へ行つたか、一寸も分らないもんだから、その儘とつて置いたが……待つてらつしやい……」と言ふなり奥の方に入つた。

私は何處から書留なんかが來るのだらう？と不審に思つた。暫くすると、一枚の書留郵便を持つて、老爺が再び現はれた。私はそれを見てハッとした。

母からである！

——一體何の用で書留なんかにしたんだらう？……——私は不審でならなかつた。

私は手を顫はして開封した。と……何と中から現はれたのは百貳拾圓の爲替ではないか！私はもう一度驚いた。私の頭を疑つた位である。私は胸を轟かして、讀み憎い母の筆跡を一字一字拾つて行つた。と私はひどい衝撃を受けて狂はんばかりだつ

了大的衝動，好像要發狂一樣。不知不覺地在老頭子面前落了淚。

『發生了什麼事麼？……』

老頭子現着莫明其妙的臉色望着我，這樣地問了，但我却什麼也不能回答。收到錢哭了起來，老頭子沒有看到過罷。

我走到睡覺的地方就鑽進被頭裏面，狼狼地哭了一場。

信底大意如下：

——說東京不景氣，不能馬上找到事情的信收到了。想着你帶去的錢也許已經完了，就心得很。沒有一個熟人，在那麼遠的地方，一個單人，又找不到事情，想着這樣窘的你，我胸口就和絞着一樣，但故鄉也是同樣的。有了

た。知らず知らずに、私は爺さんの前で、涙を落したのであつた。

『どうかしましたが？……』

爺さんが不可解の顏で、私を見つめて、こう聞いたが、私は何とも答へることが出來なかつた。金を貰つて泣くのを爺さんとしては見たことがなかつた爲めであらう。

私は自分の寢場所に入るとフトンの中に潛り込んで、どんなに泣いたことか……

手紙の意味は大體こうである。

——東京は不景氣で、直ちに仕事を見つけることが出來ないと言ふ手紙は受取つた。お前が持つて行つた金はもうなくなつてゐるだらうと考へると、心配でならぬ。一人も知合のない。そんな遠い所に、只一人、仕事を見付けることも出來ないで、困つてゐるお前を考へると、胸をエグられるやうです。併し、

農場以後，弄到了這步田地，沒有一點法子。所以，絕對不可軟弱下來，想到回家。房子賣掉了，得到一百五十圓，寄一百二十圓給你。設法趕快找到事情，好好地用功，成功了以後才回來罷。我底身體不能長久，在這樣的場合不好討擾人家，留下了三十圓，阿蘭和阿鐵終於死掉了。本不想告訴你的，但想到總會曉得，才決心說了。媽媽僅僅只有祈禱你底成功，在成功之前，無論有什麼事情也不要回來……。

這是媽媽底唯一的願望，好好地記着罷。如果成功以後回來了，把寄在叔父那里的你唯

故郷も同じことです。農場が出來てからこんなになつてしまつて、どうすることも出來ません。ですから、弱氣を出して、歸つて來やうなんて考へを持つてはいけません。家屋を賣つて、百五十圓出來たから、百二十圓お送りします。何とか足にして早く仕事を見つけて、成功するやうに、よく〳〵勉强してから御歸りなさい。私の身體は、もう長いこと持ちませんから、そんな場合、人の厄介になつても、厭ですから、三十圓殘して置きました。阿蘭と阿鐵は、とう〳〵死んでしまひました。お知せし度くありませんが、どうせ分ることですからと思つて、お知せすることに決心したのです。母は、唯々、お前の成功を祈つてゐますから、成功しない間は、どんなことがあつても歸つて來なさるな……

これは母の唯一つのお願ひですから、よく覺えて居て下さい。成功して歸つて來たら、叔父さんのところに預けて居る、

一的弟弟引去照看照看罷。要好好地保重身體再會……。

好像是遺囑一樣的寫着。我着急得很。

『也許，已經死掉了罷……』這想頭鑽在我底腦袋裏面，去不掉。

『胡說！那來這種事情！』我翻一翻身，搖着頭，出聲地這樣說，把這不吉的想頭打消，但毫無效果。

這樣地，我通晚沒有睡着一會，跳蚤底襲擊也全然沒有感到。

我腦袋裏滿是母親底事情。

母親自己寫了這樣的信來，不用說是病得很利害。看發信的日子，這信是我去做送報伕

お前の只一人になつた弟を、引とつて、世話して上げなさい。身體はくれぐも大事にしなくてはなりませんよ。……さよなら——

まるで遺言のやうな書方である。私は氣が氣でなかつた。

——ひよつとすると、もう死んでゐるんではないだらうか……——等と言ふ考へが、私の頭にこびりついて離れなかつた。

——馬鹿な！そんなことがあるもんか！——と、私は身返りを打つて、頭を振つて、こう聲に出して言ひながら、その不吉な考へを打ち消さうと努めたがどうすることも出來なかつた。

こうして、一晩中、私は一睡もし得なかつたが、ノミの襲撃も全然感じなかつた。

私の頭は母のことで一杯だつた。

母が自分で、こんな手紙を書いて來たからには、ひどく悪い筈だ。それに日付を見ると、この手紙は自分が新聞配達に行く

以前發的，已經過了二十天以上，想到這中間沒有收到一封信，——我更加不安起來了。

我決心要回去。回去以後，能不能再出來我沒有自信，但是，看了母親底信，我安靜不下來了。

「回去之前，把從田中君那里借來的錢都還清罷。順便謝謝他底照顧，向他辭一辭行。」這樣想着，我眼巴巴地等着第二天早上的頭趟電車，終於通夜沒有合眼。

從電車底窓口伸出頭去，讓早晨底冷風吹着，被睡眠不足和興奮弄得昏沉沉的腦袋，陡然輕鬆起來了。

「這或許是最後一次看見東京」這樣一想，

前に出したもので、已に二十日以上も經つてゐるのだ。この間一つも手紙を受取つてゐないので見ると……私は愈々不安になつて來た。

さうして歸る決心を堅めた。一旦、歸つたら、再び出て來られるかどうか！私には自信がなかつたが、それでも私は（母の手紙を見てから）ぢつとしては居られなかつた。

——歸る前に、田中君から借りた金を綺麗に返して置かう。で、序に、これ迄世話になつたお禮も言ふ、一寸歸つて行く挨拶をもして置かう……——こう考へながら、私は翌朝の始發電車を待ち兼ねて、とう〳〵一睡もしなかつた。

電車の窓から顔を出して、朝の冷い空氣に吹かれると、寢不足と興奮で、ボーとした頭は急に晴々しくなつた。

——これが東京の見おさめかも知れん——と考へると、××

連××派報所底老板都忘記了，覺得捨不得離開。昨晚上想着故鄉，安不下心來，但現在是，想會見的母親和弟弟底面影，被窮乏和離散的村子底慘狀遮掩了，陡然覺得不敢回去。

這樣的感情底變化，從現在要去我的不忍別離的田中君底魅力裏面受到了某一程度的影響，是確實的。

那種非常親切的，理智的，討厭客氣的素樸……這是我當作理想的人物底典型。

我下了××電車站，穿過兩個巷子，走到那個常常去的飯店子的時候，他正送完了報回來。

我在那里會到了他。

新聞舖主人のことと迄忘れて、なんだか、名殘り惜しい氣がしてならなかつた。昨夜、故鄉に憬れて、いら〳〵したこの私ではあつたが、今は會ひたいと思ふ母及弟の面影が、窮乏と離散せる村の慘狀に遮ぎられて、歸ることが急に怖ろしくなつて來るのを覺えた。

斯る感情の變化は、今訪ねようとする、別れ難い田中君の魅力に、或る程度の影響を受けてゐることは確かだつた。

その思ひやり深い、理智的な、お世辭を嫌惡する素朴さ……これは私の理想とする人間のタイプであつた。

私が××停留場を下りて、横町を二つ横ぎつて、例の飯屋に行きついた頃には、彼は已に配達を濟まして、歸つて來る所だつた。

私は其處でひよつくり彼に會つた。

原來他是一個沒有喜色的人，今天早上現得尤其陰鬱。

但是其他底陰鬱絲毫不會使人感到不快，反而是易於親近的東西。

他低着頭，似乎在深深地想着什麼，不做聲地靜靜地走來了。

『田中君！』

『哦！早呀！昨天住在什麼地方？……』

『住在從前住過的木賃宿裏……。』

『是麼！昨天終於忘記了打聽你去的地方早呀！』

這個『早呀！』我覺得好像是問我，『有什麼急事麼？……』

所以我馬上開始說了。但是，說到分別就

彼はもとよりのムッツリ屋だつたが、今朝は一層陰鬱に見えた。

併し、彼の陰鬱は毫も人に不快な感じを與へる性質のものではなく、却つて、親しみ安いものだつた。

彼はうつむき加減で、何か考へ深さうに、默々として靜かに歩いて來るのだつた。

『田中君！』

『やあ！早いですね！昨日は何處に泊つたの……』

『この前泊つた本所の木賃宿に……』

『さうか！昨日は終に君の行く所を聞き漏らしたが……早いね』

この『早いね？』は、私には『何か急用でも？……』と聞いてゐるやうに響いた。

其處で、私は直ちに切り出した。併し、別れると言ふのが淋

覺得寂寞，孤獨感壓迫得我難堪。

『實在是，昨天回到木賃宿去，不意家裏寄了錢來了……。』

我這樣一說出，他就說：

『錢……。那急什麼！你什麼時候找得到職業，不是毫無把握麼？拿着好啦！』

『不然——寄來了不少。回頭一路到郵局去，而且，順便來道謝……。』

覺得說不下去，臉紅了起來。

『道謝？如果又是那一套客氣，我可不聽呢……』他迷惑似地苦笑了

『不！和錢一起，母親還寄了信來，似乎

しくて孤獨感がひし〳〵と身に迫つてならなかつた。

『實は、昨日木賃宿に行つて見たら、家から金を送つて來てゐたので……』

と私はこんなところから言ひ出さうとすると、

『金？……それは何時でもいゝぢやないか！君には何時職につけるか見當がつかぬぢやないか！持つて居るがいゝよ！』と彼は言ふのであつた。

『いゝえ……相當澤山送つて來たのだ。後ほど一緒で郵便局に行きませう』と私は言つてから、

『實は序に挨拶に來たのだが……』と言ひかけて、何んだか言ひ憎くなつて顏を紅らめた。

『挨拶だ？何時もの御世辭なら御免だよ……』と彼は苦笑して迷惑さうだつた。

『いゝえ！實は、金と一緒に母から手紙が來たが、何んだか

她病得很利害，想回去一次……。』

他馬上望着我底臉，寂寞似地問：

『叫你回去麼？』

『不……叫不要回去！……好好地用功，成功了以後再回去……。』

『那麼，也許不怎樣利害』

『不……似乎很利害。而且那以後沒有一點消息不安得很……』

『呀！有信。昨天你走了以後，來了一封。似乎是從故鄉來的。我去拿來，你在飯店子裏等一等！』說着就向派報所那邊走去了。

我馬上走進飯店子裏等着，聽說是由家裏來的信，似乎有點安心了。

但是，信裏說些什麼呢？這樣一想，把不

お母さんの身體がひどく惡いやうだから、一度歸らうかと思つて……』と言ふと、彼は私を見上げて、

『歸れとでも言つて來たのかい？』と淋しさうだつた。

『いゝえ……歸つてはいけない……よく勉强してから歸れと言ふけれど……』

『それなら、そんなに惡い譯でもないでせうが……』

『いゝえ……どうも惡いやうだよ。それに、その後、何んの消息もないのだ、どうも不安だから……』

『あつ！君、手紙なら來てゐたよ。昨日、君が出た後、一枚來たのだ。故鄉かららしいのだ。僕、持つて來てやるから、飯屋で一寸待つて呉れ！』と言つて新聞舖の方へ走つて行つた。

私は直ぐ飯屋に入つて待つたが、家からの手紙と聞いて、幾分心が安らかになつて來たやうだつた。

併し、何と言つて來たんだらうと考へると、田中君の來るの

得田中君馬上來。

飯店老板娘子討厭地問：

『要吃什麼？……』

不久，田中氣喘喘地跑來了。

我底全神經都集中在他拿來的信上面。他打開門的時候，我就馬上看到了，那不是母親底筆蹟，感到了不安。心亂了。

不等他進來，我站起來趕快伸手把信接了過來。

署名也不是母親，是叔父底。

我底臉色陰暗了。胸口跳，手打顫。明顯地是和我想像的一樣，母親死了。半個月以前……而且是用自己底手送終的。

我所期望的唯一的兒子……

が待ち遠しかつた。

飯屋のお内儀さんが、

『何にを上げませうか……』と聞いて煩さかつた。

やがて、田中は息を切らして走つて來た。

私の全神經は、彼が持つて來た手紙に集中した。彼が戸を開けた時から、私はその手紙が母の筆蹟でないことを、直ぐ見てとつて、不安に思つた。心が動搖した。

彼が入つて來るのを待たず、私は立ち上つて、急いで手を伸して手紙を受取つた。

署名も母のではなく、叔父のだつた。

私の顏は曇つてしまつた。胸は高鳴り、手は顫へた。明らかに、私の豫想通りだつたのだ。母は死んだ半ケ月も前に……併も自分の手で息の根を止めたのだ。

私の期待せる只一人の息子……

我再活下去非常痛苦，而且對你不好。因爲我底身體死了一半……

我唯一的願望是希望你成功，能够替像我們一樣苦的村子底人們出力。

村子裏的人們底悲慘，說不盡。你去東京以後，跳到村子旁邊的池子裏淹死的有八個。像阿添叔，是帶了阿添嬸和三個小兒一道跳下去淹死的。

所以，覺得能够拯救村子底人們的時候，才回來罷。沒有自信以前，決不要回來！要做什麼才好我不知道，努力做到能够替村子底人們出力罷。

我怕你因爲我底死馬上回來，用掉寃枉錢，所以爲信留給叔父，叫暫時不要告訴你……

私が生伸びることは非常な苦痛ですし，お前の爲めにもよくありません。私の體は，半分以上死んでしまひましたから…。

私の唯一つの願ひは，私達のやうに苦しんでゐる村の人達の爲めに働ける位，お前が成功することです。

村の人達の慘めさは，言ひ盡せません。お前が東京に行つてから，村はづれの池に身投げして死んだものが八人阿添叔の如きは，阿添嬸と三人の幼子も道連れにして身投されました。

ですから，歸る時は村の人達を救ふと言ふつもりで御歸りなさい。自信のない間は決して歸つて來なさるな！何をしていゝか，私は分りませんが，村の人達の役に立つやう，努めて下さい。

私は，お前が私の死に依つて，直ぐ歸つて來たりして，無駄な金を使はないやうにと思つて，私の死を，直ぐお前に知らせ

諸事保重。嫣嫣

這是母親底遺書。母親是決斷力很强的女子。她並不是遇事嘩啦嘩啦的人，但對於自己相信的，下了決心的，却總是斷然要做到。

哥哥當了巡查，糟蹋村子底人們，被大家厭恨的時候，母親就斷然主張脫離親屬關係，把哥哥趕了出去，那就是一個例子。我來東京以後，她底勞苦很容易想像得到，但她却不肯受做了巡查的她底長男我底哥哥底照顧，終於失掉了一男一女把剩下的一個託付給叔叔自殺了。是這樣的女子。

從這一點看，可以說母親並沒有一般所說

ないやうにと、叔父さんに書置きをしましたから……呉々も

母より

これが母の遺書だつた。母は決斷力の强い女だつた。彼女は事毎にブツ〳〵言ふ喧し屋ではなかつたが、自分の信ずる所、決心したことに向つては、何時でも斷乎として、てきぱきだつた。

兄が巡査となつて、村の人達をいぢめ、村の人達からつまはぢきにされた時母は、キツパリと離緣を主張して、兄を追ひ出したが如き、その一つの例であつた。私が東京に出て來てから彼女の苦勞は、察するに餘りあるが、それでも彼女は彼女の長男であり、私の兄である巡査の世話にならうとは思はず、こうして、とう〳〵二人迄も私の弟と妹を失ひ、殘つた一人は叔父に預けて自殺すると言ふ程の女である。

この點から言つて、母は、世間で言ふ女らしい心を持つてゐ

的女人底心，但我却很懂得母親底心境。同時，我還喜歡母親底志氣，而且尊敬。

現在想起來，如果有給母親讀……的機會，也許能够做柴特金女史那樣的工作罷，當父親因爲拒絕賣田而被捉起來了的時候，她不會昏倒而採取了什麼行動的罷。

然而，剛剛看了母親底遺囑的時候，我非常地悲哀了。暫時間甚至勃勃地起了想回家的念頭。

你的母親在×月×日黎明的時候吊死了。想馬上打電報告訴你，但在母親手裏發現了遺囑，懂得了母親底心境，就依照母親底希望，等到現在才通知你，母親在留給我的遺囑裏面說她只有期望你，你是唯一

ないとも言へやうが、併し、私は母の氣持がよく理解出來た。と共に、私は、母の氣性が好きであり、尊敬もするのである。

今考へることだが、母に、若し……を讀ませる機會があつたら、ツエトキン婆さんのやうな働きをしたであらうし、父が田を賣ることを拒絕した爲めに捕へられた時も卒倒なんかしないで何かの行動を取つたであらうと思はれる。

が、母のこの遺書を見たばかりの時、私は非常に悲しかつた一時歸鄉の念が勃々として起つたほどであつた。

お前の母は×月×日夜明け頃、首を吊つて死なれました。直ぐ電報で御知らせするつもりでゐたが、母の手から遺書を發見し、母の氣持が分つたので、母の希望通りに、今迄御知らせを延ばしました。

母は、私宛の遺書で、お前を期待し効のある唯一人の息子

的有用的兒子。你底哥哥成了這個樣子，弟弟還小，不曉得怎樣……

她說，所以，如果馬上把她底死訊告訴你，你勉回家來，使你底前途無着，那她底死就沒有意思。

弟弟我在鄭重地養育，用不着就心。不要違反母親底希望，好好地用功罷，絕對不要起糊塗的念頭。因爲母親已經不是這個世界底人了……

叔父

『再看不到母親了。她已經不是這個世界底人了。』這樣一想。我決定了應該斷然依照母親底希望去努力。下了決心：不能够設法爲悲慘的村子出力就不回去。

當我讀着信，非常地興奮，心很亂的時候

だと言つてゐます。お前の兄はさうなつてしまつたし、弟は未だ小さくて、どうなるか知れないので……ですから、母の死が、直ぐお前に知れて、お前が歸つて來て、前途を臺なしにしては、自分の死が無意味になるとこう言はれました。

弟は私が大事に育てゝ居ますから、心配せず、母の希望に反しないやう、よく勉强しなさい。歸つて來るなんてそんな考へを持つてはいけません。母はもうこの世の人ではないから……

叔父より

——母の顏は、もう見られないのだ。彼女は、も早、この世の人ではないのだ——と考へて、私はきつぱりと母の註文通りに努めたがよいと覺悟を決めた。さうして、何とかして、慘めな村の爲に、働ける迄は歸るまいと決心した。

こうして、私が手紙を讀みながらひどく興奮し、心の動搖を

，田中在目不轉睛地望着我，看見我收起信放進口袋去就就心地問；

『怎樣講的？』

『母親死了！』

『死了麼？』似乎感慨無量的樣子。

『你什麼時候回去？』

『打算不回去？』

『……？』

『母親死了已經半個月了，而且母親叫不要回去。』

『半個月……臺灣來的信要這麼久麼？』

『不是，母親託付叔父，叫不要馬上告訴我。』

『唔。了不起的母親！』田中感歎了。

してゐる間、田中はぢつと私を見てゐたが、私が手紙を疊んでポケットに入れるのを見ると、心配さうに、

『何と言つて來ましたか？』と聞いた。

『母は死んぢまひました！』

『死なれましたか？』と言つて感慨無量の樣子。

『君、何時歸りますか？』

『歸らないつもりです！』

『……？』

『母は、死んでから半箇月も經つてゐるから……それに、母は歸るな、と言つて來たから』

『半箇月も……臺灣から……そんなに日數がかるんですか？』

『いゝえ、母は叔父に賴んで、直ぐ僕に知せないやうにしたんです』

『ふむ！偉いゐ母さんだ！』と田中は感嘆した。

我們這樣地一面講話一面吃飯，但是，太興奮了，飯不能下咽。我等田中吃完以後，付了賬，一路到郵局去把匯票兌來了，蠻蠻地把借的錢還了田中。把我底住所寫給他就一個人回到了本所底木賃宿。

一走進木賃宿就睡了。我實在疲乏得支持不住。在昏昏沉沉之中也想到要怎樣才能够爲村子底悲慘的人們出力，但想不出什麼妙計。……存起錢來，分給村子底人們罷……也這樣想了一想，然而做過送報伕的現在，走了一個月的寃枉路依然是失業的現在，不用說存錢，能不能賺到自己底衣食住，我都沒有自信。

我陡然地感到了倦怠，好像兩個月以來的

私達はこうして話しながら、飯を食べたが、飯は興奮した私の咽喉を通らなかつた。私は田中が食べてしまふ迄待つて金を拂ひ、一緒に郵便局に行つて爲替を現金に替へ、無理に、田中に、借りた金を返してから、所書を書いてやつて一人で本所の木賃宿に歸つた。

木賃宿に入ると、私は直ぐ横になつた。私は、くたくたに疲れ切つてしまつてゐたのであつた。さうして、ぼんやりした中にも、どうしたら、村の慘めな人達の爲めに働けるかと言ふことが考へられたが、妙案に思ひ當らなかつた。……金を蓄めて村の人達に分けてやらう……とも考へたが、新聞配達をやつて見た今は、一箇月以上も無駄足運んで今猶失職してゐる今は、金を蓄へることはおろか、自分の衣食住の爲めに働くことさへ自分には自信がなかつた。

と、私は一時に倦怠を覺えて來て、二箇月來の疲れが、一時

疲勞一齊來了，不曉得在什麼時候，我沉沉地睡着了。

因爲周圍底鬧，好像從深海被推到淺的海邊的時候一樣，意識朦朧地醒來的時候也常常有，但張不開眼睛，馬上又沉進深睡裏面去了。

「楊君！楊君！」

聽見了，這樣的喊聲，我依然是在像被推到淺的海邊的時候一樣的意識狀態裏面，雖然稍稍地感到了，但馬上又要沉進深睡裏面去。

「楊君！」

這時候又喊了一聲，而且搖了我底脚，我吃了一驚，好容易才張開了眼睛。但還沒有醒

に來たやうに、何時の間にかぐつすりと寢入つてしまつた。

時々四圍の喧騷で、深海から淺い海邊に押し寄せられたやうに、意識がモーロウとして來る時もあつたが、目を開けることが出來ずに、私は再び深い睡りに落ちて行くのだつた。

「楊君！楊君！」

この呼び聲を聞いた時も、私はやはり淺い海邊に押し寄せられた時のやうな意識狀態にあつて、うすうす感づいてはゐるのだつたが、眼が開けられないので、又深い睡りに落ちようとした。

「楊君！」

この時、もう一つの聲がして、私の足を搖つたので、私はハツとし、やつとのことで眼を開けた。けれども未だ醒めきつて

。從朦朧的意識狀態回到普通的意識狀態，那情形好像是站在濃霧裏面望着它漸漸淡下去一樣。一回到意識狀態，我看到了田中坐在我底旁邊。我馬上踢開了被頭，坐起來了。我茫茫然把房子望了一圈。站在門邊的笑嘻嘻的老板，望着我底狼狽樣子，說：

「你恰像中了催眠術一樣呀……你想睡了幾個鐘頭？」

我不好意思地問：

「傍晚了麼？……」

「哪里！——剛剛過正午呢……哈哈哈……但是，換了一個日子呀！」說着就笑起來了。

原來，我昨天十二點過睡下以後，現在已

は居なかつた。モーロ｜とした意識狀態から普通の意識狀態に歸つて來る樣子は，立て込めた霧の中に立つて，それが晴れてゆくのを見る時のやうな氣持だつた。こうして意識狀態に歸ると，私は私の傍に田中が坐つてゐるのを見た。私は急いでフトンをはねとばして，起きなほつた。私はきよと〳〵部屋の中を見廻した。と障子の傍に立つてニコニコしてゐた宿の親爺が，私の狼狽した樣子を見て，

「お前，まるで催眠術にかゝつたやうだね……何時間眠つたと思ふ？……」と言つた。

私はきまりが惡くなつて，

「もう夕方だね……」と聞いたら，

「いゝえ……晝が過ぎたばかりですよ……ハツハツハ……併し日にちが變つたぜ」と言つて笑つた。

私は昨日の十二時過ぎに寢て，今は午後の一時頃である……

到下午一點左右了……。整整睡了二十五個鐘頭。我自己也吃驚了。

老頭子走了以後，我向着田中。

他似乎很緊張。

『眞對不起，等了很久罷——。』

對於我底抱歉，他答了『哪里』以後，興奮地繼續說，

『有一件要緊的事情來的……昨天又有一個人和你一樣被那張紙條子釣上了。你被趕走了以後，我時時在煩惱地想，未必沒有對抗的手段麼？一點辦法沒有的時候又進來了一個，我放心不下，昨天夜裏偷偷地把他叫出來，提醒了他。但是，他聽了以後僅僅說：

『唔，那樣麼！混蛋的東西……。』

と言ふのだつた。正味二十五時間眠つたと言ふのだ。私は自分でも驚いてしまつた。

爺さんが行つてしまふと、私は田中に向いた。

彼は大分緊張してゐる樣子だつた。

『どうも失禮しました。隨分待たれたでせう……』

と言ふ挨拶に對して、彼は、『いゝえ』と答へて、『實は大事な話があつて來たのだが……』と興奮して續けた。

『昨日君と同じあの貼紙で、又一人釣られたんだ。君が追ひ出されてから、私は何時も對抗手段はないものかと考へ惱んだのだが、皆目見當のない今時に、又一人入つて來たものだから、僕は心配になつて、昨夜コツソリ誘ひ出して、注意してやつたのだ。所が、彼は只、

『ふむ、さうか！怪しからぬ奴だ……』

隨和着我底話，一點也不吃驚。

我焦燥起來了，對他說：

『所以——我以爲你最好去找別的事情——不然，也要吃一次大苦頭——。保證金被沒收，一個錢沒有地被趕出去——。』

但他依然毫不驚慌，伸手握住了我底手以後，問：

『謝謝！但是，看見同事的吃這樣的苦頭，你們能默不作聲麼？』

我稍稍有點不快地回答：

『不是因爲不能夠默不作聲，所以現在才告訴了你麼？這以外，要怎樣幹才好，我不懂。近來我每天煩惱地想着這件事，怎樣才好我一點也不曉得。』

等言つて、私に相槌を打つばかりで、一寸も驚かないのだ。

私はぢれて來て、

『だから……君、別の仕事でも深して置いた方がいゝと思ふぜ……でないと、又酷い目に會はされるから。……保證金を沒收されて、無一文で追ひ出されては……』と言つてやつたのだ。

所が、彼は相變らず、落付いたもので、手を伸して私の手を握つてから、

『有難う！併し、さう言ふ目に會つてゐる同僚を見て、君等は默つて居られるのかい？』

と聞くものだから、私は少しムツとして、

『默つて居られないからこそ、今注意してやつてゐるのぢやないか！その外に、どうしていゝか、私には分らないのだ。近日、私は、そのことで考へ惱んでゐるのだが、どうしていゝのか、さつぱり分らないのだ』と答へた。

於是他非常高興地說：

『怎樣才好——我曉得呢。只不曉得你們肯不肯幫忙？』

於是我發誓和他協力，對他說：

『我們二十八個同事的，關於這件事大概都是贊成的。大家都把老板恨得和蛇蝎一樣。』

接着他告訴了我種新鮮的話，歸結起來是這樣的：

『爲了對抗那樣惡的老板，我們最好的法子是團結。大家成爲一個，同盟罷×：（忘記了是怎樣講的）『同盟罷×……說是總有辦法呢。『勞動者一個一個散開，就要受人糟蹋，如果結成一氣，大家成爲一條心來對付老板，不答應的時候就採取一致行動……這樣幹，無論是

すると、彼は非常に喜んで、

『どうしていゝか……と言ふことなら、僕は知つてゐるよ。只、君等が手傳つて呉れるかどうか？』と言はれたもんだ。

そこで、私は彼に協力を誓ひ、

『吾々二十八人の同僚は、このことについてなら、大抵贊成する筈だ。皆、主人を蛇蝎のやうに嫌つてゐるから……』

と言つてやつたのだ。それから、彼は色々耳新しいことを話して呉れた。要約すればこうだ。

『私達があんな惡い主人に對抗する爲めの、一番いゝ方法は團結だ。つまり、皆が、一つになつてストライ……（何んと言つたか忘れたが）ストライ……何んとかをやると言つたよ。『勞働者は、一人一人バラバラになつてゐるから馬鹿にされるのであつて、一緒になつて、皆が一つ心になつて、主人に當り、聞かれない場合は一致の行動をとる……と言ふやうにやれば、い

怎樣壞的傢伙，也要被弄得不敢說一個不字……』這樣說呢。而且那個人想會一會你。我把你底事告訴了他以後，他說：

『唔……臺灣人也有吃了這個苦頭的麼？……無論如何想會一會。請馬上介紹！』田中把那個人底希望也告訴了我。

說要收拾那個咬住我們，吸盡了我們底血以後就把我們趕出來的惡鬼，對於他們底這個計畫，我是多麼高興呀！而且，聽說那個男子想會我，由於特別的好奇心，我希望馬上能夠會到。

向被人糟蹋的送報伕失業者們教給了法子去對抗那個惡鬼一樣的老板，我想，這樣的人對於因爲製糖公司，兇惡的警部補，村長等陷

くら悪い奴でもグウの音も出來ないやうに、取つちめてやることが出來る……』と、こう言ふんだよ。で、その人がね……君に會ひたいと言ふんだよ。僕が君のことを話してやつたら、『さうか……臺灣人にも、さう言ふ目に會つた人があつたのか……』と言つて、『是非會ひたい。直ぐ紹介して呉れ！』と、田中はその男の希望迄私に話して呉れた。

吾々に嚙りついて、生血を吸ひ盡して、追つぽり出した鬼畜生を、叩きつぶさうと言ふ彼等の計畫に對して、私はどんなに喜んだことか！更に、この男が、私に會ひたがつてゐると言ふのを聞くと、私はより以上の好奇心から、早く會ひたいと思つた。

苦しめられてゐる新聞配達夫、失業者達に、鬼畜のやうな主人に對抗する方法を教へることを心得てゐる人なら、製糖會社不都合なる官憲、村長等の爲めに慘酷な目に會はされてゐる、

進了悲慘境遇的故鄉底人們，也會貢獻一些意見罷。

聽田中說那個人（說是叫做佐藤）特別想會我，我非常高興了。

在故鄉的時候，我以爲一切日本人，都是壞人，恨着他們。但到這里以後，覺得好像並不是一切的日本人都是壞人。木賃宿底老板很親切，至於田中，比親兄弟還……不，想到我現在的哥哥（巡査，）什麼親兄弟，不成問題。拿他來比較都覺得對田中不起。

而且，和臺灣人裏面有好人也有壞人似地，日本人也一樣。

我馬上和田中一起走出了木賃宿去會佐藤。

我們走進淺草公園，筆直地向後面走，坐

私の故鄉の人達に對しても、何らかの助言をして呉れるであらうと私は考へた。

その人（伊藤とか言つた）が、特に私に會ひたがつてゐると言ふ田中の話に、私は非常に喜んだ。

故鄉に居た當時、私は、總べての日本人を惡い人だと考へて憎んでも居た。所が、此處に來て見ると、總べての日本人が惡い人だといふ譯ではないやうだ。宿の主人は親切ものだし、田中に至つては兄弟以上……否、私の現在の實兄（巡査）を考へると、親兄弟なんて、問題にならぬ。それと比べるのさへ、田中に對して濟まぬ。

して見ると、臺灣人に善い人と惡い人とがあるやうに、日本人もさうだと見える。

私は直ぐ、田中と一緒、伊藤に會ふ爲めに木賃宿を出た。

私と田中が淺草公園に入つて、ずつと奥の方に歩いて行く

在那裡底樹蔭下面的一個男子，毫不畏縮地向我們走來。

『楊君你好……』緊緊地握住了我底手。

『你好……』我也照樣說了一句，好像被狐迷住了一樣。是沒有見過面的人，但回轉頭來看一看田中底表情，我卽刻曉得這就是所說的佐藤君。我馬上就和他親密無間了。

『我也在臺灣住過一些時。你喜歡日本人麼？』他單刀直入地問我。

『……』我不曉得怎樣回答才好。在臺灣會到的日本人，覺得可以喜歡的少得很，但現在，木賃宿底老板，田中等，我都喜歡。這樣問我的佐藤君本人，由第一次印象就覺得我會喜歡他的。

と、其處の木蔭に座つてゐた一人の男がつか〳〵と歩み寄つて來て、

『楊君！今日は……』と私の手を堅く握つた。

『今日は……』と私は口眞似したが、キツネにつまれたやうだつた。見たこともない男だが、振返つて見た田中の表情に依つて、私は噂の伊藤君であらうと直ぐ感づいた。私は直ぐ打解けることが出來た。

『僕も暫く臺灣に住んだことがあるよ。君は日本人が好きかね』と彼は短刀直入に聞いた。

『……』私は何と答へていゝか分らなかつた。臺灣で會つた日本人には、好きになれさうなのは滅多になかつたからだ。だと言つて、現に、僕は、木賃宿の主人、田中等が好きである。こんなことを聞く當の本人伊藤君も初印象からが好きになれさうである。

私は一寸考へて、

『臺灣に居る時は、日本人を悪い人だとばかり思つてゐたが、田中さんは非常に親切な方だ！』と答へてやつた。

『さうだ、日本の勞働者は、大抵田中さんのやうに、いゝ人だよ。日本の勞働者は臺灣の人達が押へつけられ、いじめられるのに反對なんだよ。臺灣人を苦める人達はだな……さうだ……君の保證金を奪つた上に、追ひ出した。あのおやぢのやうな鬼畜達なんだ。臺灣に行つてゐるのは、こんな根性の人と、この鬼畜達の手先が多いからな！併しそんな鬼畜達は、臺灣の人達に對してばかりではなく、我々本國の貧しい人々に對しても、朝鮮の人達や中國の人達をも苦しめてゐるのだよ。……つまり、今の世の中は、金を持つてゐる人が、その上に、貧しい人々の働きを奪ひ、うまく奪ふ爲に押へつけてゐるのだから……』

我想了一想，說：

『在臺灣的時候，總以爲日本人都是壞人，但田中君是非常親切的！』

『不錯，日本底勞動者大都是和田中君一樣的好人呢。日本底勞動者反對壓迫臺灣人，糟蹋臺灣人。使臺灣人吃苦的是那些像把你底保證金騙去了以後再把你趕出來的那個老板一樣的畜生。到臺灣去的大多是這種根性的人和這種畜生們底走狗！但是，這種畜生們，不僅是對於臺灣人，對於我們本國底窮人們也是一樣的，日本底勞動者們也一樣地吃他們底苦頭呢……。總之，在現在的世界上，有錢的人要掠奪窮人們底勞力，爲了要掠奪得順手，所以壓住他們……』。

他底話一個字一個字在我腦子裏面響，我眞正懂了。故鄉底村長雖然是臺灣人，但顯然地和他們勾在一起使村子底大衆吃苦……。

我把村子底種種情形告訴了他。他用了非常深的注意聽了以後，漲紅了臉頰，興奮地說

『好！我們携手罷！使你們吃苦也使我們吃苦的是同一種類的人！』

這個會見的三天後，我因爲佐藤君底介紹能够到淺草底一家玩具工廠去做工。我很規則地利用閒暇的時間……(原文刪去)。

彼の言葉は一々私の腦底に響いた。私はよく理解することが出來た。故郷の村長は、臺灣人であるに拘らず、明らかに、彼等とくついてゐて村の衆を苦しめてゐるから……

私は村の有樣を色々話してやつた。彼は非常に注意深く聞いて、

『さあ！手を握らうぢやないか！君等を苦しめ、我等を苦しめるものは、同じ種類の人間だ！(共同の敵だ)』と頰を紅めて興奮して言つた。

この會見が濟んで三日後、私は伊藤君の世話で、淺草の或る玩具工場に働くことが出來た。そして、私は規則正しく閑の時間を利用して、(日本勞働組合評議會のこの人達と行き來し、ストライキの應援にも顏を出し、會議に參加し、終には演說會にさへ出て、吾々臺灣人が如何に苦しめられてゐるかを喋つたりした)。

こうして、數ケ月後には、私を追ひ出した××新聞舗に於てストライキが捲き起された。紅顏で、氣どり屋の××新聞舗主人が、新聞配達夫の團結の前に、靑ざめた顏をうなだれてゐるのを見た時、私の胸は躍つた。

私は、そのエビス顏に、一つ拳骨を喰らはして、そのベソをかく處を見たい欲望に驅られたが、我慢した。併し、彼をして承諾せしめた配達夫の諸要求は、私の鬱憤晴しより、更に更に有意義であつた。

考へても見給へ！

失業者を釣る『配達人募集』の貼紙は剝がされたのだ！

寢部屋は一人に付疊二疊、フトン一枚の割に定められ、新たに隣りの家が借りられて、皆の宿舍に當てられ、疊の表も取換へられた！

幾個月以後，把我趕出來了的那個派報所裏勃發了罷工。看到面孔紅潤的擺架子的××派報所老板在送報伕底團結前面低下了蒼白的臉，那時候我底心跳起來了。

對那胖臉一拳，使他流出鼻涕眼淚來——這種欲望推着我，但我忍住了。使他承認了送報伕底那些要求，要比我發洩積憤更有意義。

想一想看！

鈎引失業者的『募集送報伕』的紙條子拉掉了！

寢室每個人要佔兩張蓆子，決定了每個人一床被頭，租下了隔壁的房子做大家底宿舍，蓆子底表皮也換了！

任意製定的規則取消了！
消除跳虱的方法實行了！
推銷一份報紙工錢加到十錢了！
怎樣？還說勞動者沒有志氣！
『這幾個月的用功才是對於母親底遺囑的最忠實的辦法。』
我滿懷着確信，從巨船蓬萊丸底甲板上凝視着臺灣底春天，那兒表面上雖然美麗肥滿，但只要揷進一針，就會看到惡臭逼人的血膿底迸出。

（完）

勝手氣儘な規定は剝がされたのだ！
ノミ退治の方法が講ぜられたのだ！
讀者勸誘一人當拾錢に値上げされたのだ！
どうだこれでも、勞働者は意久地がないと云ふのか！
——この數ケ月の勉强こそ！母の遺言に對する最も忠實なやり方だ——
と、私は確信に滿ちて、巨船蓬萊丸の甲板から、表こそ美々しく肥滿して居るが、一針當てれば、惡臭プン〳〵たる血膿の逆りを見るであらう臺灣の春を見つめた。

（一九三四・五・一）

中日文對照

中國文藝叢書

（第六輯）

送報伕

中華民國三十六年十月發行

定價台幣

外埠郵費另加

著者 楊遠

發行人 張歐坤

發行所 臺北市延平路二段五〇號 東華書局

郵撥 臺灣一〇四六四番

NATIONAL CENTRAL LIBRARY 國家圖書館 R.O.C.

〇〇〇〇二

國家圖書館
002573100 C115